
よろず委員会！

ヒュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よろず委員会！

【Nコード】

N0898F

【作者名】

ヒユウ

【あらすじ】

魔法がある世界。だけど魔法が衰退しつつあり代わりに科学が幅を利かせるようになった世界。そのため魔法があってもなくても、生活できるようになった。そんな世界の日本の静杏高校には、奇妙な委員会がある。たった二人しかない委員会だ。理事長の孫娘という地位を使ってこの委員会を作った張本人、佐久間理音とその後輩である丁寧な物言いのわりに毒舌屋である宮森駆乃の二人しか。彼らが所属しているのは校内の物理的、魔法的トラブルを解決するなんでも屋の委員会。その名はよろず委員会という！

案件その1 二人しかいない委員会

もしもこの世に魔法がなかったらどうなっていたのだろうか？

はるか昔、まだ文明というものできた当初は人々にそういった能力はなかったそう。そのへんのところは小学生でも知っていることだし、中学では詳しく習った。魔法が人類に発現したときは大混乱が起こったらしい。私たちにとって当然なことがその当時の人たちには非常識を超えてもはや悪夢だったろう。だから畏怖をこめて、魔法、と言われた。

けどどうしてそんな能力を得たのか未だにわからないらしい。宇宙人が人類を改造したとか、ウイルスによる人間の突然変異とかいろいろ説があがっているけど、どの説にも確証がない。そのため人類最大のミステリーと言われている。

けどもしそんなミステリーが起こらなかったら？私は時々想像してしまう。

きっと今よりずっと科学が発達していたんだろうな。

どうなの？そこところ？

昔の人たちは魔法の限界を知ることなく、魔法に頼り魔法とともに生活していた。

しかしそれはやっぱり昔の話。

魔法というものは応用が利きにくく、また科学というものの存在が発達しみんなに認知されるようになると次第に科学のほうに重心が向いて行った。

そして現代。

すでに魔法に関しての知識が知らなくても世の中は生活できるようになった。自力で空を飛ぶより、車や飛行機のほうがずっと速いし快適だ。

けど魔法の存在が完全になくなったわけじゃない。フーアーという空をどれだけ速く飛べるかを競うスポーツがあるのがいい例だ。

あれはすつごく人気で世界大会が毎年開催され、そのたび世間の話題をかつさらっていく。今の魔法はそういう娯楽としての位置が大部分を占めている。

けど魔法はいいことばかりだけではなく困ったことも運んできてしまう。悩ましいことだ。

そのために私たちは

「先輩。先輩つてば」

机に向って黙々とペンを走らせていた佐久間理音は、自分が呼ばれていることに気づいて頭を上げた。その動作で彼女のポニーテールが揺れる。無駄がないすらっとしたスタイルに、端正な顔立ちが男の気を引くことも多いが、瞳の意志の輝きからわかるように非常に活発的な少女でついていけないと脱落することもまた多い。彼女の近くには少年が立っている。

「何？くのつち？」

「やめてくださいよ、そのあだ名」

嫌そうな顔をする。

みやもりくの

宮森駆乃というのが彼の正式な名前だ。今年は入学したばかりの一年生なので理音より一つ学年が下にあたる。所属する静杏高校の学生服を着て、眼鏡を掛けている。彼は視力は悪くなく、この眼鏡は伊達眼鏡なのが彼のチャームポイントだ。

「何をそう熱心に行っているのですか？勉強はありえませんか、反省文でも書いてるんですか？」

馬鹿にしているのか、それとも単に理音が何をしているかに関心を持っているのかわからないような駆乃の物言い。しかし理音は慣れているためにあまり気にしない。

「手紙を書いているのよ」

「手紙、ですか？」

意外そんな表情を駆乃は見せる。今の世、若者は誰でも携帯電話を所持しているのでメールで連絡を取り合うことが常なのに、どうしてだろうか。

「そう。魔法のある世界から魔法のない世界へ、近況報告」
何が楽しいのか笑顔でそういった。

「……………」

理音に何も言いたくもないが、代わりに目で訴えることにした。批難をこめて、今すぐそのイタイことをやめろ、と。

しかし駆乃の心情を察しず理音は、素敵でしょ？と笑みで返してきた。しかたなく駆乃は口を開いた。

「あるんですか？そんな世界？」

「ないって誰も証明していないじゃない。だったらあるかもしれないでしょ？」

子供の屁理屈を聞いているようだ。駆乃は嘆息する。

「仮にあつてとしても、その手紙とやらをどうやって送るんですか？」

その一言に、理音は眉間にしわを寄せて、ひどく困ったように考え始めた。

「うーん、どうしよう。それ」

どうやらというかやっぱりというかそれは思いもよらなかったことらしい。

駆乃はどうしてこうなったのかと考え、その原因が自分に起因していることを思い出して、理音に馬鹿な質問をしてしまったと悔やんだ。過去には戻れないので、話を変え、理音を呼んだ用事を済ませ、そうことに決めた。

「馬鹿な事を考える前に現実の問題を考えてください」

そう言つて彼は理音の前に一枚の紙をぶら下げる。

「生徒会からです。先月の解決事項が5つしかないというのが少し納得がいかなかったようですね」

受け取った理音はしばし書かれた文章に読み、徐々に目を釣り上

げっていった。

「だったらもつと人を寄越しなさいっての。私たち二人しかないのに」

いらだちを紙をぶつけ、そのせいでびりびりに細かく引き裂かれてしまい、もはや紙くずをなってしまうたものをゴミ箱に捨てる。

「無理ですよ。あなたが無理やり作った委員会ですから、あなたが責任をもつて対処すべきです。このよろず委員会は」

駆乃は冷静に理音に説いている。

言っていることがもつともなために尚更理音は不機嫌になり、鼻を鳴らす。

と、その時。

元々教室だった場所をベニヤ板で二分し一方は備品の置き場として、もう一方はよろず生徒会の会室として利用させてもらっている。その会室のほうの、理音達がいるほうのドアをコンコンと叩く音がした。

「はい、どうぞ」

理音が切り替えができず苛立ちのこもった声で言ってしまう。

遠慮がちに登場してきたのは小柄なショートカットヘアの少女だった。元来の性格か、はたまた理音の不機嫌な様子を察してか相手の顔色をうかがうような低姿勢でいる。

「依頼ですか？」

駆乃は接待用の笑顔で対応する。少女は頷き、駆乃に促されて椅子に座る。

「さて、聞きますか。あ、まずは私たちの自己紹介からしなきゃ。

私は佐久間理音。隣にいるのは宮森駆乃。あなたの名前は？」

理音はまっすぐ少女を見る。隣では駆乃がノートに内容を書き写す用意をして、耳を傾けている。

「一年三組の鈴村^{すずむらたま}珠^{たま}って言います。あ、珠っていう字は珠玉のしゅのほうです」

「珠ちゃんね。珠ちゃんは私たちに何を依頼したいの？」

珠は何を躊躇しているのなかなか話を切り出さなかった。深呼吸してからようやく口を開く。

「あの……最近この学校で起こっている……し、下着泥棒のことをご存知ですか？」

頬を赤らめ、恥ずかしそうに言う。

「知ってるわよ。前にその泥棒を捕まえてくれてという依頼があったよね？くのつち？」

うんうんと頷き、それから自分の記憶が正しかったのか駆乃に同意を求めた。

「確かに一年五組の被害のあった女子生徒からそういう依頼がありました。最近あらわれた下着泥棒は一年の女子更衣室ばかりを狙い、被害は五人まで及んでいます。調べてはいますが下着泥棒はなかなか巧妙なやつらしくなかなかしつぽがつかまりません。それと、くのつちはやめてください」

ノートにペンを走らせているために、駆乃は顔を上げずにいつもの通り冷めた口調で言う。

「というわけなの。私たちも調べてはいるんだけど下着泥棒も狡猾というか、ずるがしこいというかなかなかつかまらなくて」

申し訳なさそうに理音は珠に言う。おろらく彼女も被害にあった人物なのだろう。だからこのよろず委員会に依頼しにきた。困っている人を助きたいのに、まだ困っている原因を取り除くことができないことに理音はひどくもどかしく思う。

「……………その……」

ためらいがちに珠が何かを言おうとする前に、その声があまにか細かったために駆乃には聞こえず、

「これは私見ですが、犯人はこの学生でかつロリコンのが可能性があるあるんじゃないでしょうか」

という推測を言ったので、珠は思わず目を見開き、声を飲み込んでしまった。

「一年生しか狙わないというのがそのロリコンたる証拠です。まあ、

上級生の更衣室には侵入ができない小心者の後輩という説もありますが。また、何度も入られ警備が厳重になっているはずの一年の女子更衣室を、先生方の監視の網をかくぐれるのは外部犯ではきついものがあるはずです」

「確かに今年の一年は美人がそろっているから、ムラムラきちゃったんでしょうね」

駆乃の仮説に、理音は納得気に頷いた。目の前にいる珠もそうだが、例年に比べ今年は男子が垂涎しそうな女子が多い。

「……………あ、あの……………」

泣きそうな声が珠のほうから上がった。

理音だけではなく思わず駆乃も珠のほうに向く。すると沈痛な面持ちがそこにはあった。

「……………わ、私の……………彼です」

駆乃と理音は顔を見合わせる。

「何が？」

二人の疑問を理音が代表して珠に聞いた。

「下着泥棒の犯人……………私の彼氏です」

珠は声量は小さいながら最後まではつきりと言い切った。

今の言葉を理解するのに少々時間がかかってしまった。その間、二人は硬直している。

「……………」

理解した後も、二人は凍りついたように表情が固まってしまっている。

困惑と驚愕、そして先ほど下着泥棒とはいえ珠の彼氏をぼろくそに言い合ってしまったことへの後悔、罪悪感、そのための謝罪の言葉をなんて言うべきか。脳の処理機能を最大速にしても間が空いてしまい、しかもきちんとした解決が見つからない。

気まずい雰囲気が辺りを包んだ。

おまけ

私立静杏高校のよろず委員会委員長、佐久間理音！

我がよろず委員会とは、おそらく世界中探してもこの学校しかない生徒たちの悩みや依頼を見事に解決する素晴らしい委員会！魔法によるハプニングもすぐに鎮圧できる優秀な人材がそろっています！

ちよつと先輩、何やってんですか？

見ればわかるでしょ。宣伝よ、宣伝。あ、委員の募集も言わないと。創立して間もないためにまだ二人しかいなく、今入会すれば副委員長もすぐになれるかも！只今委員を大募集中！
くのつちもほら。何か言いなさいって。

だからそのあだ名はやめてくださいって……

……じゃあ、とりあえず一言。

あー、ごほん。この異様な委員会に入会しようという酔狂な方はいらっしゃらないと思いますが、もしいらっしゃるようなら歓迎します。一緒に委員長のおもりをがんばりましょう。

なにそれ？釈然としないわね……

けど、まあ、いいわ。それじゃこの辺で。

ばいばーい

案件その1 二人しかいない委員会（後書き）

初めての投稿です。至らない点が多々ございますが生暖かい目で見守ってくれたら幸いです。

誤字や脱字があったり、わかりにくい表現等がございましたら申し訳ありませんが一報をくれたら嬉しいのです。

最後に、見てくださって本当にありがとうございます。

案件その2 依頼

しばらく呆然としていた駆乃と理音。やがて、

「な、何か証拠を見つけたんですか？」

駆乃はどうか絞り出すようにして珠にそう聞く。とりあえずきちんとした事実なのかを問うことにした。そのあと、先の非礼を詫びても遅くはない。ただその時はロリコンやら小心者やら散々なことを言ってしまったので、土下座も止むなしだ。

「……………はい、あります……………見ちゃったんです、私。一緒に屋上でお弁当を食べていた時に、彼のポケットから何かがはみ出していて……………気づいた彼はあわててポケットにしまいこみましたけど、どう見てもあれはブラのホックの部分でした。それにこのところ妙にそわそわしているし、それが下着泥棒が現れたところと丁度重なるし……………私、どうしたらいいか……………」

言葉を紡ぐにつれて、涙が珠の瞳にたまり始めていた。今にも決壊し大洪水が起こりそうだ。

それに大きく慌てるよろず委員の面々。急いで理音が自分のハンカチを珠に手渡した。

「と、とりあえず落ち着いて。ね？冷静に考えていきましょう」

言っている本人が動揺しているためにあまり説得力はなかったが、一先ず珠はハンカチの礼を言い、目頭をそっと押さえた。

「先ほどは申し訳ないことをしました」

駆乃はきちんと反省の気持ちを示わにして謝罪した。

「あなたの気持など露知らず、犯人に、あなたの彼氏に罵詈雑言を……………猛省してます。このとおりです」

その場で深く頭を下げ、理音にも頭をつかんで強引に頭を下げさせる。その際鼻頭を机にぶつけ、理音は小さく呻く。

「っ馬鹿。痛いじゃない！」

横目で駆乃をにらむ。しかし駆乃は理音を無視し、ひたすら珠に

平謝りをしている。

「もういいですから……………顔……………上げてください」

恐る恐る駆乃は言われたとおりにする。目の前にいる珠は不安の色を隠せていないものの、だからといって泣きそうになることもなく健気に耐えているようだった。

「あなたの言ったとおり確かに下着泥棒は変態さんのすることです……………けど私は信じています。私の彼はやさしくって穏やかで決してそんなことをする人じゃありません。これにはきつとわけがあるんだと思います」

信じているというより、信じたいというほうの思いが強いように見えた。それから彼女は勢いよく立ち上がり、深く頭を下げた。

「お願いします！彼を……………日野綾君ひのりょうを助けてあげてください！」
彼女は精一杯の勇気をこめていったのだらう。スカートの裾を掴む手が震えている。

駆乃は何も言わず理音の反応を伺った。依頼を受けるかどうか最終的な決定権は委員長にある。

彼女は腕を組み、しばし目を閉じ考えていたが、目を開き、

「わかったわ」

静かにそう言っただけ珠は顔をほころびそうになったが、安心したのもつかの間、理音はさらに言葉を続ける。

「けど、私たちのやることは彼が下着泥棒をした原因を見つけ出して、私たちのできる範囲でそれを除去すること。だから理由もなくあなたの彼氏が自分の本能を抑えきれないで犯罪を起こしていたとわかった場合は、いいわね？」

射抜くように見つめられ、珠の身がすくむ。しかしそれは一瞬のこと。覚悟を決めた瞳で首を縦に振る。

「はい、わかりました」

「意外と強かったわね」

珠がこの会室を去ってから、ぽつりと理音は漏らした。

「最初の印象は弱そうだったのに」

「好きっていう気持ちがそうさせたんでしょね」

という駆乃の何気ない言葉に、

「好き……………か」

感慨深く理音はつぶやいた。そして駆乃を見つめる。

「どうしたんですか？いつもと違う、変な顔をして」

途端に理音はふくれっ面を作った。

「情緒がないわね、あんたは！」

「何で怒るんですか！？理由を説明してください、理由」

「うつさいわね！あと、さっきはよくも私の鼻を思いっきり机に激突させてくれたわね。ものすっごく痛かったんだから」

やられたらやり返す。ということで理音はうなじのあたりを両手で思いっきりつかんで机にぶつけようと力を込める。当然、駆乃は抵抗するが女の子といえ相手は理音（失礼）なので意外ときつい。「ちょ、先輩。やめてくださいって。それに先輩だって失礼なことをしたんだから一緒に謝るのが筋ってものでしょ？」

「口うるさいことをいうのはこの口か？この口か？」

理音の手が駆乃のうなじから滑るように頬に移動。そしてつねる。

「いたたたたたっ痛いって、先輩」

さらに全体重でのかかってきた。駆乃は目を白黒させる。後頭部に何やら柔らかいものが……………

「っ！」

言葉にならない声を上げ、どぎまぎしてしまい、思わず力を抜いたのが運の尽きだった。ガクツと体が崩れて、駆乃は机に先ほどの理音のときとは比較二倍の速さで激突。

「あ」

理音が気づいた時は、机に突っ伏した駆乃を中心に血の海が広まり始めていた。

おまけ

そういえばまだ一度魔法が出ていないわね。早くぶっぱなしたいっていうのに…………

別にいいですけど。魔法なんてあってもなくてもオレの生活にはなんの障害はありませんから。それより今日は先輩の自己紹介なんですからしっかりやってくださいよ。

わかってるわよ。

私の名前は佐久間理音。二年一組で、読書が割と好きかな。

先輩には読書ですか…………

所属している委員会はもちろん、よろず委員会。昨今は魔法を悪いほうに使いたがるやつが多くて、みんなが困っているの。学校の風紀委員だけじゃ物足りないし……………そこで私はおじいちゃんにかけあって、この委員会を作ってもらった。

自分の祖父が自分の通う学校の理事長というのは、大変便利なよう

ですね……………

もちろん生徒が困っているなら魔法がかかわっていることだけじゃなくてもオツケーよ。恋愛とか。

恋人はいままでに一人もいませんのに……………

こらーっ！……くのっち……！

案件その3 委員長の異変

昼休みに嬉し恥ずかしの自業自得もとい、理音の横暴にあつたせいで、よろず委員会の会室に入ってきた駆乃は放課後になつてもいまだに鼻の奥のあたりがズキズキとしているために鼻にティッシュを詰めていた。入ってから光景に、彼は眉根を寄せている。

今日は珍しいことが起こっていたからだ。いつも自分より来るのが三十分遅い理音が彼より早く着いている。

「今日は槍でも降りそうですね。先輩がこんなに早くいらつしやるなんて」

さつそくの皮肉。昼休みの恨みはまだ心の中でわだかまっている。「そ、そうね」

答える理音はなぜかぎこちなかった。

不審点が一つ増え、また一つ駆乃は理音の不審点を見つけた。

「先輩。窓際にいつまでも立ってらつしやらないで、こっちに来て座らないんですか？いつもは自分はこのボスだって主張するかのようになんか真つ先に座っているのに」

「い、いいじゃない。たまには」

確かに気まぐれというのは誰にでもあるのかもしれない。しかし、駆乃と視線をあわせないようにしているし、スカートがずれ落ちない程度に裾を下にひっぱらうとしているし、今日はなんだか妙にそわそわしている。

駆乃は心配になつて思わず、

「どうしたんですか、先輩？体調が悪いんですか？」

と理音のそばに行こうとしたが、

ぎくつ、理音の体が強張り、叫ぶ。

「ま、待って！」

その迫力にピタリと足を止める駆乃。不思議そうな表情を浮かべる。

「な、なんにもないわよっ い、いいから、珠ちゃんの彼氏のこと調べてきたんでしょ？その報告！」

話題を無理矢理変え、駆乃は納得はいかないもののそこまで言うのなら、と引き下がった。

席に着いた駆乃は自前のメモ帳を広げる。

「意外にこの依頼は早く解決できそうですね。もしかしたら今日中に終わるのかもしれませんが」

「何かあったの？」

「はい。彼がどうやって更衣室に忍び込んだのかはまだわかりませんが、あとはだいたいのことがわかりました。日野綾。15歳。一年四組に所属。性格は鈴村玉の力説したのとだいたい合っていますね。優しくて、穏やか。つまり人の頼みをあまり断れない、押しに弱い人物ということです。美術部に籍を置いていて、期待の新人らしいですよ。彼は自分の魔法の力だけで美しい氷の彫刻が作れるほどの水の能力をもっているそうです。それでよろず委員会がそれをいたく評価し委員にしたいというのを名目に、日野綾の友達に彼のことを尋ねたら、興味深いことが聞けました。下着泥棒が現れる少し前に、この学校の不良グループの一つに標的にあっているのを悩みとして打ち明けられた、と」

「つまり……その面白半分の不良グループに脅されて、し、下着泥棒をしたということね……」

理音の瞳の奥で炎がめらめらと燃えている。憤激の炎が。

「その可能性が高いですね。まだ別の人が犯人だということも否認ませんが、とりあえず今は日野綾を犯人、その日野綾を指示しているのが不良グループと想定してしましよう」

「だったら今日から、ずっつとその子の監視をしていればその証拠がつかまるはず」

自分達の方針が見え、理音は張り切っつていこうとしたところを、

「それもいいですけど」

駆乃がやんわりと口を否定した。

「こなさなければいけない依頼は他もあるんですから、この依頼だけに時間をとるわけにはいきませんよ？」

「じゃあどうするの？」

「ある程度時間を絞り込んで監視しましょう。下着は盗んだ証として不良グループの目に見せなければなりません。犯人としては一刻も早く、その下着を手放したいため盗んだ当日に不良グループに見せたいでしょうから、下着の盗難が出た日に日野綾監視するんです。後手に回ってしまっているのが自分としては気に入らないのですが、この際自分の好みは問題ではありません」

「じゃあ、早速行くわよ」

やる気がみなぎっている割には静かな足取りで、会室のドアのほうに向かう。

「早速つて。今日は被害にあつたなんて聞いてませんよ」

「被害にあつた人が黙ってればそうなるわよ」

頬を赤らめ、ぶつきらばうに理音は言った。

「……………先輩、もしかして……………」

理音の動きがドアに手をかけたところで止まった。しかし駆乃のほうは見ないでその場でうつむいている。

あることに閃いた駆乃はそこまで言つて、言葉が続かなくなった。今までの不思議なそぶりが全部あれが原因だとすると、全てのつじつまがあう。しかし犯人は一年の更衣室ばかり狙っていたはずだ。彼女は二年生。その頭の中でのつつこみが彼を最後まで言わせなかった。

駆乃の代わりに理音が後の言葉を引き継ぐ。

「下着……………盗まれちゃった……………」

爆弾発言。

さらに可愛げなき女、佐久間理音が、恥じらいによって醸し出し雰囲気が可愛げを飛び越してどこか色気をとまなうものになっていまい一層の駆乃を驚かせる。

衝撃のあまり鼻に詰められていたティッシュが飛ぶ始末。そして

鮮血のしずくをポタポタと落ちていく。しかしあつけにとられている駆乃は、何もせず恥ずかしそうにうつむいている理音をぼつと見ている。

今度は正確に情報を記入していた彼の自慢のメモ帳の上に、血の海が広がった。

おまけ

オレの扱いがひどすぎる気がするんですが、気のせいではないですよね？

気にしちゃいけないわよ。それより今日はくのっちの自己紹介なんだからびしっとね、びしっと。

そのあだなはやめてくださいって……………

ともかく、あー、ごほん。一年一組の宮森駆乃と言います。趣味は映画鑑賞。好きな言葉は義を見てせざるは勇無きなり。いい言葉ですね。

私の好きな言葉は当たって砕ける！

好きなタイプは、少なくとも人に無用な迷惑をかけない人です。細かく言うなら某委員長の正反対のような人物ですかね。

私の好きなタイプは……………！

よろず委員会という突飛な委員会に所属しています。なかば強制的に入会させられ、世知辛い世の中を頑張って生きています。

そう言いながらもまんざらでもなく、委員会のために貢献してくれるのっち！

謝りますよ、前回のことは……………

案件その3 委員長の異変（後書き）

前は書かなかったですけど、今回からあとがきも書きたいと思います。

魔法……言葉は出てきても誰もつかってはくれませんよね……
そういう世界にしまった自分が悪いんですけど、とにかく早めに出したいと思います。

読んでくれてありがとうございます！

案件その4 駆乃の怒り方

美術部である日野綾は美術室で部活動に勤しんでいた。キャンバスに向かつて絵をかいているようだった。何が描かれているのかわからない。遠い上に、キャンバスはこちらに背をむけているからだ。綾は先ほどから何度か室内に設置されている簡素な置き時計のほうをちらちらみる。ずいぶん落ち着きがない。

そろそろかと、駆乃は思う。時間を気にしているのはおそらくだれかと会う約束をしているのだろう。緊張して何度も時計を確認するほどの。

双眼鏡を握る駆乃の手に力が入る。レンズを覗き込む瞳は細く鋭い。獲物を狩る狩人を連想させるが、鼻に詰めているティッシュのせいでやや滑稽にも見える。最初は関心をよせなかった依頼だったが、今ではずいぶん感情が入ってきている。主に喜怒哀楽の二番目

が。
駆乃は今、よろず委員会の会室の窓際いる。実はここから中庭をはさんで、美術室がのぞけるのだ。どちらも同じ三階に位置し南棟の一番端に美術室があり、北棟の端から二番によろず委員会の会室がある。

綾がついに行動を起こした。片付けをし、学生鞆を手に他の部員に頭を下げ、美術室から出て行った。

「動きました。あとはお願いします」

駆乃はそういって、隣にいる理音に双眼鏡を手渡した。

「わかったわ。がんばってね」

受け取った理音は駆乃に代わって綾を監視する。

「はい」

応援の言葉を笑顔で受け、駆乃は会室をでた。その際、ついでに痛みが引いたため鼻につめていたティッシュをゴミ箱に捨てる。

小走りで廊下を駆け、階段を下り、一階にある北棟と南棟をつな

ぐ中央廊下を渡る。中央廊下を通過して、南棟を真っ直ぐ進むと生徒用玄関が突き当るのだが、そこで丁度綾の姿を発見した。一応見失ったら携帯で監視している理音から南棟限定だが、綾の所在がわかるようになっていたが、どうやら必要ないらしい。走るのをやめ、歩きに変える。綾は上履きを下駄箱に入れていた。ということには外に出るらしい。自分もあまり目立たないように、つまり自分も何か外に用事があるのだというふうに平然として靴を履き替える。先に出て行った綾は、真っ直ぐ行くところある学校の正門にいかず、違う方向に向かつていった。駆乃は綾に見つからないように、他の周りに生徒から怪しまれないように苦心しながら、スニーカーのように粘着的に、またスニーカー以上に鮮やかな手並みで後を追っていた。どんどんと人気のないほうへと進んでいく。

やがて学校の裏側に設置されてある部室棟へと綾は足を運ばせ、周りを注意深く見まわしてからその建物の蔭へと消えた。なんとか見つからずにすんだ駆乃はその部室棟に近づき、壁に背をつけ、曲がり角の向こうにいるであろう綾とプラスアルファの部室棟裏での密会に聞き耳を立てた。

「お、御苦労さま。いつもながらよく見つからないね。見つかったほうがおもしろいのに」

綾ではない声がする。嘲笑しているのが目に浮かびそうな悪印象を相手に抱かせる口調だ。

「これ、ちゃんとリクエストしたやつらのだな？」

新たな声が聞こえる。今度は低く柄の悪い声。

「う、うん」

弱気なこの声の主は、おそらく綾だろう。やはり脅迫に屈した犯行だったらしい。自分達の仮説が正しかったことにひとまず良しとして、しかしまだやる事が残っているので気を緩めない。

「へー、じゃあさー、オレが頼んだ佐久間理音のは？」

次に聞こえたのは妙に間延びしていた。しかし、駆乃はそんなことはどうでもいい。問題は………今、だれの名を上げた？ 駆乃

は自分の理性の糸がぶちぶちと引きちぎられていくのがわかった。

「は、はい。これ………です」

「お、意外や意外」。かわいいな、このパンツ。オレンジの柄が入ってる」

糸が引きちぎられるどころか、まるで初めからなかったのような新しい境地に駆乃は入っていった。どこまでも怒りのボルテージが上がるような憤怒ではなく、深く暗い所に凝縮された怒気が静かに燃えている。

「あゝ、でもいいにお

「黙れ」

ぴしゃりと言いつ放つ。怒鳴るより鋭気がこもっている。不良の一人の話の腰をバリバリに粉碎してから、駆乃は自分の姿をさらけ出した。

突然の闖入者に、身構える不良グループ。それぞれ赤、青、金に髪を染めていてまるで信号機のような。綾はひたすら当惑している。その足元には学生靴、女性用の下着がいくつも飛び出している。

駆乃は素早く確認した。オレンジの柄をした下着を手に持っているのは、髪を赤に染めた男だ。ぎゅっと握りこぶしを作る。一瞬その男と視線があつたため、向こうは眼をつけてきた。

「ああ？てめー誰だ？ここでなに

「ごんつと鈍い音が響いた。喋っていた赤髪の男は肺の空気を全部吐き出され、くぐもったうめき声を発した。腹のあたりを押さえ、地面に崩れ落ちる。

駆乃は右拳を前に突き出す体勢を取っていた。倒れている男とはまだ距離があるのにもかからわず、殴る仕草をした瞬間赤髪の男は実際に殴られたように反応した。

突然のことに、残った二人の不良はあつけにとられていたがすぐに理解する。

「魔法か………」

青髪の男がそつつばやく。おそらく風を使つた魔法だろう。拳に

風を纏わせて、突き出すときの拳圧とともに凝縮した風を打ち出す。不良なんぞやっているために、喧嘩に有効な魔法の術を知っている。自分たちの身の危険を感じ、すぐに不良らは臨戦態勢を整えた。

金髪で肩幅ががっしりとしている男は両拳に炎を発生させた。しかし、

「遅い」

炎が拳を完全に包み込まないうちに、駆乃は左ストレートを放った。

空気の塊が金髪の男の顔面に直撃する。が、倒れない。よろけつつもなんとか踏ん張っている。

「図体がでかいと、無駄にタフだな」

わずらわしそうに駆乃は感想を言う。

「てめえは一体なんだよ!？」

ズキズキと痛む頬に手を当て、金髪の男は強気でいこうとするも体は少し萎縮している。この飛ぶ拳を繰り出すことのできる人物を知っているが、相手の痛覚に刺激するような距離は1メートルと言っていた。それ以上は突風にあてられただけになってしまうと。しかし目の前にいる男との距離は3メートル以上離れている。

金髪の男の言葉には、何をしにここに来たんだという問いだけではなく、おまえは一体何者なんだという存在の凄絶さに対するものもこもっていた。

「オレはよろず委員会所属、宮森駆乃。観念してもらおうか、下着泥棒」

律儀に答えるところはいつものおりの冷静に思えるが、目が据わっているあたりやはり怒っている。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ。盗んだのはこいつだぜ?」

言い訳じみた事を青髪の不良から返ってきた。綾にむかって指をさし、必死に弁明する。

「お前らがそう脅したのはわかっている。むしろそいつよりたちが悪い」

だが駆乃はそれを無情に切り捨て、構える。

相手の脅威に平和的な解決がしなくなったが、どう見ても話合いに応じる気はない。自分たちよりも性質が悪い気がする。追い詰められた不良達。そのうちの金髪のほうが事を起こした。

近くで最初から事の次第に呆然としていた日野綾。その首を後ろから腕をからめ締め付けたのだった。苦しがる綾の姿を駆乃に見せつけ、叫ぶ。

「う、動くな。こいつがどうなってもしらねえぞ!」

綾はすぐるような目つきを駆乃に向ける。助けを乞う無言の叫び。
「好きにすればいい」

駆乃の容赦ない言葉に、死刑宣告を受けたように綾の顔から血の気が抜けて真っ青になる。

「例え脅されていたとはいえ、よりにもよって……………よりにもよって……………」

そこで駆乃は倒れている赤髪の男の手に持つオレンジの柄の下着を……………理音の下着を一瞥する。そして金髪の男を見る。駆乃の瞳には剣呑な輝きがあった。

「歯を食いしばれ」

その言葉と一緒に、渾身の力をこめた飛ぶ拳を放った。

おまけ

祝!この話になってようやく魔法が登場!

しかもくのつちが使って、しかもすつごく強い！

そのため今回はくのつちの魔法講義を始めるわよ！どうぞ！

だからそのあだ名やめてくださいって……………そのためって何がそのためなんですか……………

あー、ごほん。魔法というのは、平たく言うと自然を操る力とでも言いますかね。今回の自分の使った風が一番使いやすいですね。不良の使いそうだった火なんかは集中が欠けていると自分の手が燃え上ってしまって、服に引火した時にはもう最悪。あつという間に黒こげの焼死体ができあがってしまいますから注意が必要です。今回はここまでです。

短いわね。

次もあるんです。長い目で見ていてください。

そうね。頑張っていこう！

案件その4 駆乃の怒り方（後書き）

そろそろ下着泥棒の件は終わりそうです。次の話を考えていますが、いっこうにいいものがひらめかないのは、きつといい発想をしようとする努力が足りないからでしょう。精進するためにもいろいろなアニメ、小説、マンガ、映画、ゲームをやって、いろいろな物語を知り参考にしたいです。

最後に、読んでくださって本当にありがとうございます！

案件その5 二度あることは……

「さて、どうする？人質はとって意味がないというのはこれで証明されたが……」

駆乃は身がすくんで動けないでいる青髪の不良に話しかけながらも、視線は重なるように倒れている二人の男へ向けていた。

金髪の不良を下敷きして綾は気絶していた。駆乃はきちんと金髪の不良の額にピンポイントで当てたが、綾には一切手を出していない。あまりの恐怖による失神だった。

残るは一人。その最後の一人に駆乃は焦点を当てた。

後がないと知った青髪の不良は、ひきつった愛想笑いを浮かべた。「お、おいおい。待ってくれよ。たかが委員会の仕事なんかそんなにクソ真面目にやらなくたっていいだろ？気楽に行こうぜ？」

「まあ、確かにな」

存外素直に返事をしてきた。

追い風に乗ったと思った不良は、さらにまくしたてるように続ける。

「だろ？それに聞いたぜ？おめーんところの委員長、相当なジコチユー女なんだろ？きつと強引に入れられたかでおめーも迷惑してる？だからさ……」

そこまでいってから、青髪の不良は口をつぐんだ。駆乃の様子に異変を感じたからだ。先ほどより、自分の睨む目がさらに鋭くなっていた。

そこでようやく自分が地雷を踏んだと気づいた。

「確かに勧誘は強引な上にしつこかった。だが最終的には、オレの意志でよろず委員会に入った」

駆乃ははつきりとそういった。その気持ちに一片の嘘は混じっていない。

「自己中心的だというのは……まあ認めるが」

認めるのかよ、というつつこみはもちろん言えない。そんなことを言う余裕はない。

「だが先輩は、本当の勇氣をもった人だ。困っている人を助けたい。そのためによるず委員会を作った。俺はその心意気に惚れている」
ゆっくりとした足取りで青髪不良に近づいた。一歩進むたびに、不良は一步後ずさりする。

「ま、待て。待てって」

裏返った声で不良がどれだけ精神的に追い詰められているのかわかる。どうにかこの状況は妥協できないかと、彼は生まれて初めてその脳みそをフル回転させた。

すると、視界に隅に映るあるものに彼はひらくものがあつた。慌ててオレンジの柄の下着を手に取り、駆乃の前に差し出した。それが火に油を注ぐこととなるだけとは知らずに。

「つ、つまり、お前、理音に気があるつつつことなんだろう？こ、これがあいつのだからさ」

「だから見逃してくれ……………か？」

駆乃は加減することにした。もちろん優しさからではない。先の二人のようにすぐには氣絶しないように、ある程度苦痛を味わってもらうために……………

「お、おい。く、来るな。来る

んぎゃあああああ

ああ！」

その時偶然部室棟内で、軽音バンド部が練習のために爆音を響かせ始めた。彼の悲鳴は、それにかき消され、不運なことに誰にも氣づかれることがなかった。

蛍光灯のついた会室にて、理音は立っていた。すでに双眼鏡でのぞくという行為をやめ、人を待っているという行為をしている。

日が暮れても、駆乃は戻ってこない。帰りが遅いことにひよっとして何かあったんじゃないのかと心配した矢先、駆乃が帰って来た。「どうだった？」

「うまくいきました」

端的に駆乃はそういった。そしてややしんどそうに近くの椅子に腰をかけた。

「それにしては遅かったじゃない」

理音の質問に、駆乃は反省の念をあらわにして言う。

「なかなか目を覚まさなかったんですよ。やはり暴力は非効率でいけないですね。あんなことでいつもの自分を忘れてしまうとはまだまだ精進が必要です」

「？」

理音は不思議そうな表情をする。

「気にしないでください」

あなたの予想通り、日野綾は不良グループに脅され、犯行に及んだようです。犯行の手口は、通気口から更衣室に侵入」

「通気口？確かにあったような気もするけど……………人が入れるようなものだったっけ？」

「確かに通気口は子供でも入るのが厳しいほど狭いものです。しかし彼は得意の水魔法を使ったと白状しました。それで体を極限まで柔らかくしたのだと。人間の大半は水分でできていますから、可能だとは思いますがすごい反面、無茶苦茶でもありますね。一歩間違えば、体が軟体動物のようにぐちゃぐちゃになって二度と元にもどらないかもしれないのに」

「すごいわね。我が委員会に加えたいほどの逸材だわ」

理音の顔は感心しきっていたが、答える駆乃の顔は苦い。

「おそらく無理でしょう。不良グループと異口同音に二度とよろず委員会に関わりたくないといっていましたから……………」

「そうなの？どうして？」

「……………」

駆乃は話しづらいために黙っている。

「ところで鈴村珠からの依頼の件ですが」

結局話したくなかったために、駆乃は話を変えた。

「日野綾を助けるという依頼でしたので、もう不良グループも手を出さないことも誓ったので達成したことになります。ついては不良グループの処遇は不問として、盗ませた下着を返すことを徹底させる、というのでよろしいでしょうか？彼らのことを先生方に話した場合、日野綾のことをどれだけごまかしても、どこでボロが出るかわかりません。彼らが日野綾に下着泥棒をしていたことを話すかもしれない。そうなると日野綾にもなんらかの責任が問われるでしょう。助けるという鈴村珠の依頼が達成できなくなります」

「少し甘い気がするけど……………そうね、そういう依頼だったもんね」

理音は駆乃の意見に肯定し、

「それで……………あれは……………」

急にもじもじした態度で駆乃に接する。

察した駆乃はためらいながらもポケットから不良グループから取り返したオレンジの柄の下着を取り出した。平然とした顔をしようとして努力するが、結局理音に目があわせられないままそれを理音に手渡す。

「ど、どうぞ」

「あ、ありがと」

手渡されたほうも顔が真っ赤だ。

「う、後ろ向いてますね」

駆乃はぎこちない動きで理音に背を向け、窓のほうを向く。カーテンを急いでひいて、外からの見えないように隠す。

「……………見ないですよ？」

「わかっています」

理音はそう駆乃に釘を打っておいてから、着用をしようとする。駆乃の耳に衣擦れの音が聞こえ始めた。男としてこれは悩ましい。その煩惱を慌てて振り切って、カーテンでもじっと眺めてようと思ったとき、カーテンの隙間があることに気づいた。大雑把にカーテンを引いたために、完全に窓を覆えなかったようだ。

きちんと閉めようとしてカーテンに手を伸ばす 止めた。

外は暗い。この会室は明るい。そのために窓に駆乃の背後の風景が鮮やかに映った。下着を穿こうとしている、なまめかしい理音の姿が。

頭を鈍器で殴られたような衝撃を受ける。

鼻腔の奥からつーんとした感覚に襲われる。咄嗟に鼻を押さえるより先に、盛大に紅の液体がこぼれる。今度は床の上に血の海が広がった。

二度あることは三度ある。

その諺を、今日は身をもって知った駆乃だった。

おまけ

.....鼻血でオチを作りますか？普通。もっとまして斬新な終わり方にしてほしいですよ。なんで自分がこんなに汚れ役を引き受けなきゃいけないんですか、まったく.....

くのつち、拗ねているわね。

当然ですよ。あんな扱い受ければ誰だって。それとくのつちはやめてください。

まあ、とにかく依頼が解決してよかったわね。

そうですね。まだほかにも依頼はあるので喜んでる暇はありませんけど.....

やっぱりもつと人がほしいわね。

そうですね.....そういえば今日はやらないですか？魔法の講義。

忘れてた.....というかあんたわかってたんならさつさと言いなさいよ！おかげで今回は余裕がなくてできないじゃない！

言われなきゃやりませんよ。こんなこと.....

案件その5 二度あることは………（後書き）

ここまでで一応一つの区切りとなっています。

いかがだったでしょう？

甘口でも辛口でもいいので感想もしくは批評をしてくれたらうれしいです、ホントに。

次の話では新キャラでも出したいなと思っています。

最後に、読んでくださって本当にありがとうございました！

案件その6 体は子ども、頭脳は年寄り

私立静杏高校。

今日の授業は終わり、あるものは部活、またあるものは帰宅、さらにあるものは委員会、と各々に行くべき場所、行きたい場所に向かっていく。

生徒用玄関から学校の正門をまでの道を行こうとする生徒たちの流れ。その流れに逆らって、つまり正門をくぐり学校に行こうとする一人の少女がいた。

彼女を見た生徒たちは皆不審げな表情を露わにしている。一人だけ逆方向を歩いているからではない。仮にそうだとしても学生服を着ているし、忘れ物を取りに戻ったのだらうということもありえる。特に気にはならないだろう。確かに可憐さは目を見張るぐらいあるが、それも相手に不審を抱かせるものではない。

彼女の特異な点。それは小さいことだ。ざっと見まわして彼女以外の一番背が低い女子生徒でさえ、首ひとつ分彼女のより背が高い。中学生 小学生といわれても納得がいつてしまう。それぐらい小さい。

彼女はそんな奇異の視線を受けつつも、慣れているのかそれらを全く気にせず先に進む。

学校に入った彼女はどの教室にいくわけでもなく、ある部屋に行きつく。

理事長室。ドアにはそう札が掲げられている。

少女はノックをすることなく、堂々とドアを開けた。

理事長室だけあって威厳があるたたずまい。豪華な椅子に腰かける理事長は、髪やひげは色素が抜け落ちってしまったがそれを感じさせないバイタイリティを体から放っていた。貫禄はある。……

……寝てさえいなければ。

彼は腕を組み、背もたれに寄りかかっている。熟睡しているのか、

寝息が少女の耳に届く。

少女が入ってきててもそれに気付かず、理事長はまだ寝ていた。

この学校のトップクラスに位置するもののこの態度に、

「やれやれ」

と少女は少々呆れている。

「起こさねばな」

彼女の手には、青白い糸のようなものがバチバチと走っては消え、走っては消えを繰り返し始めた。

彼女は帯電したその手を、幸せそうに眠っている顔の上に、置いた。

一般の人間なら目を覚ますどころか、再度意識を失うような凄まじい雷撃を理事長の体を通して。

「起きろ」

少女の言葉に、何事もなかったように理事長は目を覚ました。眠そうにあくびし、体を伸ばす。

そして平然と少女に挨拶する。

「おはよう」

それから首を傾げる。

「ところで、おまえは誰だ？」

少女は怪しい笑みを浮かべる。

「わしじゃよ。わし」

容姿とはずいぶん掛け離れた年寄りのような口調で自分を指差した。

「その声は……………琴ちゃんかい？またずいぶん若くなったねえ」

理事長は驚いてはいるものの納得がいった顔をしている。少女の口のきき方には問題ないらしく、まるで長年付き合っている友として扱っている。

「今日来たのは下見かな？明日からの学校生活のための」

「ああ。特におまえが自慢する孫娘とわしの入る予定のよろず委員会とやらをな」

琴といわれた少女はそう答える。それから眉根をひそめ、

「おまえにも一応挨拶に来たわけじゃが……………仕事中に居眠りとは感心せんな」

「昨日、平和のために仲間と一緒に親父狩り狩りを夜遅くまでやっていたからな」

琴の咎めに、理事長は笑ってごまかす。

「わしの体は昔のように若いが、おぬしの場合、心がそうじゃな」溜息が自然と琴からこぼれる。

「そうだろ、そうだろ。まだまだ若い者には負けてられないからな」今度は声に出して笑い始めた。

もうかまってられないとばかりに、琴は踵を返しさっさと理事長室から立ち去ろうとした。

「ああ、おい」

後ろから声をかけられ、半身だけ理事長のほうへ向ける。理事長の顔には真剣みを帯びていた。

「くれぐれも俺との関係は孫娘に言つなよ。それと……………」

少女の全体をざっと見てから顔を緩め、

「似合っているぞ、その服装」

からかいとも褒めともとれる言葉に、

「当然じゃ」

自信満々に言いきった。

おまけ

魔法にとって一番大事なこと、それは『条件づけ』です。例えば、炎を纏った拳を放とうとしましょう。その時、生み出した炎に自分が火傷したらしゃれになりません。そのため炎の被害から自分を外す、つまり生み出した炎が自分を焼かないように条件づけをする必要があります。もちろん、服もそうしなければいけません。じゃないと真っ裸になってしまいますから。

大事よね、これは。

大事だと思っているなら、きちんと条件づけをやってくださいよ！

そんなに怒鳴らなくてもいいじゃない。くのっち。

自分にとっても死活問題だからですよ。あなたの失敗は凄すぎて、周りの人、つまり俺に迷惑がかかっているんですから。それとそのあだ名は止めてください。

えっへん！

褒めてません！

案件その6 体は子ども、頭脳は年寄り（後書き）

この世界の魔法は、杖を使ったり、魔法陣がなかったり、ということがありません。若干従来の魔法とは違うということです。

今更で本当申し訳ないのですが、この場を借りてそのことをお伝えします。

最後に、読んでくださって本当にありがとうございます！

案件その7 三人目の同志

駆乃はよろず委員会の会室で書類の整理をしていた。彼一人だけだ。理音は生徒会に呼び出されているためいない。

コンコンッと、ドアをノックする音が響いた。

「どうぞ」

駆乃は入場を促す。それから顔を上げ、会室に入ってきた人物を確認しようとする。

「……………」

小さい。とても小さい。それは琴だった。

容姿も不思議に思ったが、駆乃はそれ以上にこのような生徒はこの学校にいたのかという疑問にかられた。

「依頼ですか？」

それでもうる覚えなので自分の記憶がまちがっているかもしれない。接待態度で出迎える。

しかし琴はその問いを無視し、頭のとっぺんから足のつま先までを探るような目つきで見つめている。

「お主が宮森駆乃か？」

逆に琴のほうが見ねる。

「まあそうですが……………」

駆乃は肯定しつつも、少女の横柄な態度をいさめようと思った次の瞬間、

「御免っ」

裂ぱくの叫びとともに、琴は突き出す手の先からためていた電撃を解き放った。

猛る稲妻の如く、空間を不規則にくねりながら駆乃に強襲する。

電気の糸は駆乃に取りつく。突き出した、その右手に。しかしそれ以上他の部位に駆け巡らなかった。駆乃は額に冷や汗を浮かべている。

反射的に駆乃も手の平を突き出し、まわりついてきた雷撃が痛みとなって刺激する前に完全に自分のものにしてしまったのだった。なんとか成功はしたが、失敗するほうの確率のほうが高く、自分の無事に駆乃は小さく息を吐く。

パチパチと拍手。

「すごいぞ、お主！ここまでの魔法の使い手はそうおらぬ。よろず委員会、興味半分だったのが、俄然に興味がわいたぞっ」

琴は興奮しきった表情で言う。

褒めているようだが、駆乃はちっとも嬉しい気はしない。それどころかえらい目にあわされ、一歩間違えばあまり考えたくない事態が待ち構えたのだ。好感が持てるはずがない。

「お前、何者だ？」

琴を見る駆乃の面持ちは険しい。場合によっては手に持っているバチバチするものをお返ししなければならない。

その質問に答えようと思ったのか、琴が口を開けた時、がんと勢いよくドアを開け閉めする音がした。理音がぶんぶんとした顔で会室に入ってくる。

「あの副会長、むかつく~~~~！」

地団駄をして、悔しさを表現している。

「確かに私たちは風紀委員や生徒会治安部より全然人が少ないわよ。生徒全体の悩みといった大きなことを解消してあげるのは難しいわけど！私たちよろず委員会のほうが生徒一人一人の悩みを解決しようとしている！それをなんであいつは評価しないのよ！ひどいと思わない！？ひのっち！？」

駆乃のほうを向いたところで、小さな少女の存在に気付く。今までは怒りで頭が一杯でそれどころではなかったらしい。

「ん？あんた、誰？」

少女は駆乃のときと同じように、質問を聞き流し、理音のことをじーっと見ている。

その視線を遮るように駆乃は理音の前に立った。明確な意志を込

めた双眸で琴を貫くように見ている。

「いや、おぬしのようなことはせぬ」

駆乃を安心させるように琴は言う。

「ただわしは、これから厄介になってもらうよろず委員会の、その長がわしの目になうかどうか見極めさせてもらっただけじゃ。そしてそれは、合格じゃ。いい瞳の輝きをしとる」

「我がよろず委員会の三人目の同志！」

理音は琴の手を取り、喜色を満面に染めている。

「そういうことじゃ」

琴は相槌を打ち、一層理音を喜ばせた。

その事にあまり氣にくわないような顔をしているものがある。駆乃だ。

「自分は反対です」

はつきりそう言い、理音は振り返って駆乃を見る。どうして、と
「彼女は怪し過ぎます。いきなりオレに魔法を使うし、こんな生徒見たことないし、小さいし、口調がおかしいし」

理音は琴のほうを見る。

「言い忘れた。わしの名は、いちじょういんこと一条院琴。一年生だ。明日からこの学

校に転校してくるものだ。今日は下見として参った。この委員会には噂で聞いており、興味を持った次第だ。その男には力量が知れたかったために、仕方なく攻撃した。口調が少々古風なのは時代劇をこよなく愛しているからじゃ。それと、人の成長は人それぞれじゃと思うぞ」

再度、駆乃のほうへ向く。

「理にかなっているわ」

「道理に外れています」

駆乃は反論した。

「この六月に転校生ですか？力量を図るため、仕方なく？いくら時代劇が好きでも、そんな風になりますか？」

「別にいいじゃない。そんなこと」

新しく委員が入ってくれる。そのことに理音は狂喜乱舞しそうなほど嬉しいので、琴について些細なことなど別に気にも止めない。理音は聞く耳を持たないが、なおも駆乃は言及しようとする。両者の意見は平行線をたどりそうだ。このままではらちが明かない気がする。

そこで二人の言い合いを眺めていた琴は一案練った。

「さてはお主」

と口火を切る。

「この者を好いておるな？」

視線は駆乃、指した指先は理音に向ける。

「「なっ……………！」」

言葉は失う二人。

「聞くところによると、この委員会は二人しかいないらしいな。わしがこの委員会に入れば、二人つきりにいられることが少なくなる。じゃから、そうわしを邪険し、入れさせまいとしているのじゃな？」
ニタニタと意地の悪い笑みを琴は浮かべている。

頬を朱を染め、理音は駆乃の表情を垣間見ようとする。

「わ、わかりました。歓迎しますよ！」

その視線から解放されたいために、半ばやけくそのように駆乃は了承した。残念そうな顔をしている理音とは顔を合わせられない。

「二人ともよろしくな」

そんな中で琴は平然とそういった。

おまけ

念願の新人委員登場！その名は一条院琴！

それでも3人しかいないんですよ。この委員会。

何言ってるのよ。千里の道も一歩から。今は少ししかなくても時期に数十の下部組織ができるぐらいには

できません。それにそこまでいきません。あなたは世界征服でも企んでいるのですか？

.....世界征服.....いい言葉ね！

いや、あの、冗談ですよ？そんな真顔になってもらっても困るんですけど.....

そうよね、せつかくだからそのぐらいでっかい野望があったほうがいいわ。目指せ、世界征服！

おーい。

案件その7 三人目の同志（後書き）

今のところ毎日、投稿できる余裕がありますが、じきに忙しくなってしまう。だから今のうちに頑張りたいと思います。
最後に、読んでくださって本当にありがとうございます！

案件その8 生徒会治安部

「由々しき事態だわ！」

バンつと、生徒会副会長こと野々山木のやまの実は机を叩いた。あまりの強さに、その長机が振動する。

肩まで垂れる髪を輪ゴムで粗雑に後ろでまとめているが、けして下品には見えない。整った顔立ちがそうさせているのだろう。しかし男子生徒からは、もてはやされるどころか恐れられている。その理由は、きつそうな、そのまなざし。威圧感すら放つ時もあるほどだ。

今はその威圧感をまんべんなく辺りに散りばめている。

「下着泥棒がいなくなったら今度は、この近辺で中年男性を標的に乱暴を働き、金品を奪い取るという事件が立て続けに起こっている。しかも目撃者の証言によると、なんとこの学校の制服を着ていたらいいわ！大変なことよっ」

などとまくし立てる一方、聞く側は無反応とはいかないものの、薄い。

木の実達が居るのは生徒会室。教室と同じ程度の部屋で長い机を中心に向けて四角形に囲んでいる。

木の実こじまじゅうは黒板側に位置し、その後ろでは手にチョークを持って書記の古島修こじまじゅうが立っており、黒板に白い字を走らせている。被害場所、そう書かれた下にはこの地域の地図が張られてあり、所々に赤いバツ印が点在している。どの場所も大通りから外れた、人気のない所だ。

古島修に背を向けている木の実こじまじゅうは、この教室にいる他の面々、五人の顔をぐるっと見回す。今日は生徒会治安部の会議としての会議で、各委員会の長と副長が集う生徒会執行部の会議ではないために少ない。風紀委員の委員長と副委員長、生徒会治安係の二名、それに生徒会長、副生徒会長、書記がこの室内にいる。

「そのために今日から、生徒会治安部と風紀委員でこの近辺を見まわりをすることを提案します。どう、芹沢？」

と、木の実は隣で席に座っている男に同意を求めた。

「ふーむ、そうだな」

考える素振りはしているものの、めんどくさそうな表情を浮かべている。

この人物こそ、芹沢泰史^{せりざわやすふみ}。この静杏高校の生徒会長だ。普段頼りなさそうだが、やるときはやってくれと評判がある。やらないときは全然やってくれないのだが。

「ひとまず……………寝ていいか？少し眠くてな。ふあゝ」

大きな欠伸を一つ。腕を大きく上に伸ばす。まさにやる気のかけらもない。

「一生寝てろっ」

鈍い音が連続して響く。怒った木の実が芹沢の頭に拳を打つおろしたときの打撃音、その後勢い余った泰史の顔面が机に直撃にするときの音。そして泰史は沈黙する。

啞然とするのは廊下側の机に座っている二人の女生徒。窓側にいる男女はこの凄絶な光景を日常茶飯事として扱っているのか、驚いている様子はない。古島は、木の実には聞こえないように小さく、痴話げんか、とこぼした。

「東堂は？」

怒りを潜めた木の実は今度は窓側にいる男に意見を求めた。この男にそれはないだろうが、ふざけた答えは生徒会長のようなオチが待っている。

みんなからお堅いといわれている、それがしょうがないとなつくしてしまいそうになる厳格そうな雰囲気その男は身についている。

「かまわない。ただ、まだ一年生には荷が重いな。二年生以上の風紀委員を動かすのなら問題ないが。それが風紀委員会の意見だ。いいか？」

堅そうな口調で返事し、風紀委員長の東堂剛志とうどうつよしは隣に視線を動かす。視線の先にいる副委員長である宮野葵みやのあおいは首肯する。

その答えに木の実は満足したように頷く。

そこに、窓側にいる女生徒の一人が手を挙げる。彼女の名は日羽夕実ゆみ。数少ない治安係に一人だ。治安係とは、文字通り学校の治安を維持するための集団で、ある条件を満たしていないと入ることはできない。それは、魔法の扱うの力が特に秀でていることだ。

「あたしたちは一年生といっても治安係だから参加すべきですよね？」

むしろ参加したい！、という意味が伝わってくる。

はりきっている夕実とは対照的に、隣で一つ席を空けて座る眼鏡をかけている少女、長野静は嫌そうな顔をしている。あたしたち、ということは自分も混ざっているということになる。治安係に所属しているとはいえ、あまり危ないことには関わりたくない。

「そうね。二人は治安係なんだから、一年生とはいえ戦力としては申し分ない。ぜひ参加してもらいたいわ」

「はい！」

「……………はい」

気のりしているのかしていないのか、はつきりそうとわかる返事を二人はした。

「ということで今日から、見回り！」

宣言するように木の実は言った。

「それはいいんですけど……………」

横から控え目な口調の声割って入ってきた。見ると古島が未だ倒れている生徒会長の頭をつんつんと指で突っついている。

「一応生徒会長だし、この人にも確認をとったほうがいいんじゃないでしょうか？」

しめることといい、言っていることといい、二年生が三年生にすることではない。

「いいのよ」

「そうですか」

あつさり木の実はいい、古島もあつさり引つ込んだ。
生徒会長、芹沢泰史。彼が欠けていても、会議は進む。

おまけ

今回は、琴ちゃんに自己紹介をしてもらいましょ！どうぞ！

自己紹介じゃな。まかせておけ。

ホントのことをいつているのかはなはだ疑問ですけどね……………

わしの名は、一条院琴。こんな身の丈じゃが、ぴっちぴちのななじゅ　　十五歳じゃ。

いまどきの女の子はぴっちぴちなんて言葉は使いません。それに今、すごいことを口走りそうになりませんでした？

一年一組に所属してある。クラスのは皆、転校生であるわしに優しくしてくれる。いいクラスじゃな。

趣味は、囲碁、将棋など嗜んでおり、なかなかの腕と自分でも自負

しておるぞ。

くのつちとクラスが一緒じゃない！

しかも隣同士じゃ。

ええっ！？

いきなり大声出さないでください。それとそのあだ名、いい加減にやめてください。さらにオレは優しくした覚えはありません。

とはいいつつも、授業中、まだ教科書を用意していなかったわしに自分のを一緒に見せてくれたがのう。

うらやましい……………

案件その8 生徒会治安部（後書き）

琴を出したついでに、生徒会も出そうと思ってだしてみました。このあと、よろず委員会と生徒会がからんでいくのか楽しみにしていたできれば嬉しいです。

最後に、見てくださって本当にありがとうございます！

案件その9 水ではなく風

駆乃は額に汗を浮かべていた。緊張した眼差しは、瞬きする間も惜しいのか見開き、ただ一点のみを集中していた。

会室にある長机。その端に駆乃は座っている。両の手を膝に置き、背を曲げ、かがみこんで前を見ている。

視線の先、机上には、氷が五つ等間隔に並べてあった。コップに入れられるくらいの小さな氷だ。その氷がまるで独り歩きしているみたいに、すーっと少しづつ駆乃から離れている。やがて、向こうの端まで動き、止まった。

ふう、と駆乃は大きく息をついた。手の甲で額の汗を拭う。

「つくづくお前には感服させられる。良い『遠響^{とおなり}じゃな』」

確かこの部屋には自分しかいなかったのに、いつのまにか入口には琴が立っていた。感心している。

遠響、それは魔法を扱う技術の一つだ。魔法が自然を操るということなら、人体の触れている部分の自然を干渉することは、あまり努力というものは必要しなくてもできる。しかし、触れずに意識と想像だけで自然を干渉しようとするとは難易度が跳ね上がる。

「じゃが」

琴は、駆乃から机の端にある氷に目を向ける。すると勢いよくすべての氷がはじけたように急上昇、それから直角に曲がって駆乃のほうに向かっていく。ぶつかるかと思いきや、目と鼻の先でぴたりと止まった。机に着地。五つの氷とも列を乱すことなく、きれいに並んだままだ。

「上には上がいる、ということじゃ」

挑戦的な笑みを浮かべた。

「おまえ……………本当になにもんだ？」

駆乃は思わず問う。これほどの遠響をできるものはまずいない。間違いない世界でも相当上位に入る魔法の使い手だろう。

「人によつて相性のいい属性というものが存在する。もちろん逆もしかりじゃ。人が人に愛され、また、憎まれると同じように」
話が飛んだ。

「お主、あまり水に好かれていないようじゃな。見てとれる」
「大きなお世話だ」

自覚していたことを琴にあてられてしまった。その不思議さよりも、悔しさが出てきて駆乃はそういった。

琴はいい遊びおもちゃでも見つけたように、瞳が喜々で輝いていた。駆乃。冷静沈着のようできて、なかなかからかいがいのある。

「そういえばお主」
「なんだ？」

粗雑な態度で駆乃は返事する。

「お主、真に理音のことが好きなんじゃな」
「…馬鹿言つな」

駆乃は身じろぎをしなかった。聞く直前と聞いた直後に体勢の位はない。

しかし、琴は見逃さない。駆乃の目が泳いでいることに。それに答えを返すのも間があつた。口元がにやけてしまう。

「なるほど。道理で委員会にわしが入る時しぶっていたくせに、お主に理音と一緒にいたいものじゃろうとわしが質問したら掌を返したように賛同したのじゃな。理音に、恋慕の情をもっていることを知られたくないために」

凶星をつきすぎているそんな琴に、しかし何も言えない駆乃。
やっぱり新しいよろず委員はるくなものではないと思った。

おまけ

ここでは生徒会の悪い点をみんなで話し合っわよ！

愚痴なんかしたって気分は晴れませんよ。

愚痴じゃないわよ。生徒会という組織の悪いところを見つけ、機会があつたときにそれを生徒会の連中たちに指摘してあげるのよ。

ああ、なるほど。口げんかになったときに、痛い所つけるために、ですか。直接言っあたり先輩らしいですね。

でしょ！

我が意を得たりって顔をしないでください。それに、なにもそこまですぐ生徒会のことを毛嫌いしなくても……

副会長だけ嫌ってんでしょう？ だったらその人だけを狙うべきですよ。

細かいことは気にしないの！ いいからやるわよ！

面倒……………

案件その9 水ではなく風（後書き）

八話まで毎日更新していたのに、この九話は二日ほど空いてしまいました。投稿小説の中には毎日書いて投稿している人もいて、その人は本当に凄いとつくづく思いました。

最後に、見てくださって本当にありがとうございます！

案件その10 部活救済も可

梅雨の季節は終わり、蝉の鳴き声がうるさくなってくる。

今日は快晴。まだ本格的な夏ではないのに、暑い。学校のグラウンドにいたるなら尚更だ。できることなら、涼しい会室に戻っていたい。しかし、依頼をこなさなくてはならない。我慢しよう。

と、憂鬱になっているオレとは違って、まるで日差しを浴びて花が鮮やかに咲くように日光を受けてまるで子供みたいにはしゃいでいるやつがいる。

そう、佐久間理音こと先輩だ。

「こら、そこ！ばやつとしない！」

先輩は大きな声でへばっているやつに注意をしている。ルールを知らないから、疲れて倒れそうになっているやつらに向かってそう叱咤することしかできない。知らないなら普通この依頼を受けませんよ、先輩。

今回の依頼は、とある部活を助けることだ。その部活とはフーアー部。風に乗って飛び、一定距離内のタイムを競うスポーツ。かなり昔からある伝統あるスポーツだ。世界大会は全世界生中継されるくらい人気がある。

部活としても割と人気のある部類に入っているのだが、どういうわけかこの学校では落ち目なほうにいる。大会では地区大会止まりやる気がない上に部員も少なく男女合わせて八人で、次の大会では個人戦はともかく男子団体戦は六人必要だから一人足りない。女子団体戦はあと三人も必要だから難しいが、せめて男子だけは、とフーアー部の部長はよろず委員会に依頼を運んできたということだ。大会の団体戦の人数合わせ、それと士気の上。それが部長が依頼してきた内容。

オレは多少風の扱いができるので、仮部員となって大会に出場する予定だ。あと、技術的な指導も少々。しかし他のよろず委員会の

二人は違ふ。

「おらー、根性出せ！」

「も、もう駄目で……………す」

「立て！立つのよ！気合だ！」

集中力が切れ、空からよろよろと降りてきた部員にすかさず先輩の声が飛んだ。先輩は手になぜか竹刀を持っているが、使わずに怒鳴るだけ。だったら持つてくる意味あったんですか？というかもっと具体的な指導をしてくださいよ。気合いだの根性だの、精神論、やめてください。

「お主、才能がないのう」

「え……………でも練習すれば……………」

「練習しても、駄目なものは駄目なのじゃ」

未来ある一年生部員にむかつて、死刑宣告をしているのは琴だ。そこまではつきりと断言してしまうと、むしろすがすがしい。だが、明日からこの一年生部員が部活に出てこないことになりそうだ。目が潤んでいて、今にも泣きそうにいる。

さて、依頼をよるず委員会に出した当の本人、部長の遠野伊沙子はというとこの状況を見て後悔しているのかと思いきや、嬉しいそうだ。先輩達のやっていることに悪いとはおもっていないらしい。その点を指摘すると、

「やっぱ部活はこれくらい活気があってほうがいいからね。今まではお通夜みたいに暗かったし」

確かに歩くシンバルこと先輩は騒がしいが、それを活気があると言うとは、ものはいいようだな。

ともかく練習だ。顧問の先生は未経験者。指導者がいないので、微力ながらオレがその代りを担わないとな。

三年生はいない。部員は一、二年生だけで構成されている。二年の男子部員三人は今、先輩がしごいている。一年の男子部員二人は今、琴が身も蓋もない物言いでうちひがれさせている。

残った一年一年生女子部員二人と部長をオレが教える羽目になっ

ている。

「とりあえず風を纏いましょう。それから少しだけ、体を浮かせる」
頷く部長、首をかしげる一年生女子部員。

「…………… 初歩的な練習を言ったとおもったのだが…………… 間違
っていたのだろうか？」

再度部長のほうを見ると、苦笑いを浮かべている。

「ごめん。まだそこまでいっていないのよ、この子たち」

つまり教えるということか。しょうがない。

「では、まずオレがやるんで見てください」

軽く一呼吸。慣れていることなので、次に空気を肺に取り込む間で、微風が体を包み込む。髪が揺れる。

「こんな感じです。とにかく意識を体全体に巡らします」

言われ、さっそく実践する二人。

その間、部長が話しかけてきた。

「すごいね。そんなに早く風を纏えるなんて。あたしより断然すごいよ」

混じり気なしの称賛。少し照れる。

それから急に相手がオレの手を取ってきた。

「お願い！あたしもつと速くなりたいの。だから」

「こらー！そこ！たらたらしない！」

背後からもともと大きかった先輩の声がまた一段と大きくなった。
部長の言葉が遮られる。

「すみません。聞こえませんでした」

そう言つと、部長は改めて言おうとする。

「駆乃君。私」

「気合だー！」

うるさい！先輩、本当にうるさいです。まるですぐ隣にいるかの
ような……………

というか隣にいる、先輩が。いつのまに。

なぜかはわからないが、目つきが悪い。オレの目を見ているので

はなく、手のほうを見ている。

「くのつち。私の魔法も見て！」

わけもわからず先輩はそういった。

「ちょ、ちよつと」

止める間もなく、能力が発動した。

暴風が先輩を中心に吹き荒れる。

あまりの突風に耐え切れずオレは吹き飛ぶ。

止められなかった自分に責めながら、おきまりの言葉が浮かんでくる。

先輩、そのあだ名、やめてください……………

おまけ

困った生徒、助けます！

少ないけど、みな優秀……………

どんな依頼ももれなく解決じゃ！

それが我ら！

よろず委員会！

よろず委員会……………

よろず委員会じゃ！

くのっち、もっとお腹から声出さないとだめじゃない！

そうじゃぞ、せっかくの決め台詞が恰好がつかんじやろつ。

勘弁してください……………あとくのっち、やめてください……………

…

案件その10 部活救済も可（後書き）

このよろず委員会、どこまで行くかはわかりませんがネタがある限り続けていきたいです。

最後に、読んでくださって本当にありがとうございます！

案件その11 委員長の心配

「いいですか。今回は奇跡的なことに、オレ以外の誰も怪我をしなかったからいいものを常識的に考えて大惨事になるとこだったんですよ。前からいつているように人前で魔法を使うなら、もっと扱いができるようになってから使ってください。そのためにもっと

ぐだぐだ。

くのつちの説教がまだ続く。校長の話じゃなんだからもつと短くならないのかな。聞いているのが退屈。

私がほんの……ほんの少しだけ魔法を失敗しただけなのにこんなにガミガミ怒るなんて。責任は自分にあるから何も言えないけど。それに軽い打撲傷とはいえ、くのつちに……駆乃に傷を負わせてしまった。そのことが心で少し痛み、おとなしく説教を聞くことにしている。

結局、私の魔法の失敗のあと、後片付けとかで時間を省かれ、練習ができなくなってしまった。

くのつちが言っ通りだ。怪我をしている人がくのつち以外にいないのが不思議なくらい周りにはさんさんたるありさまになっている。グラウンドの隅で練習していたから、他の部活に迷惑はかかんかったんだけど、フーアー部員はあんなに近くにいたのに誰も怪我していない。

「ちよつと、先輩。聞いているんですか？」

そつくのつちに指摘され、はつと我にかえる。

「わかつてるわよ、くのつち！」

全く聞いていなかったけど、とりあえずそつ元気よく返したら、深いため息をされた。なんでため息？

「もついいです……あとそのあだ名やめてください」
よつやく解放される。

私は駆乃のことをくのつちって呼んでいるけど、あんまりいい顔をしてくれない。けど諦めるか。絶対に定着させてやる！

「なんで意気込んだ顔をしているんですか」

「内緒」

私の態度に不思議に思ったくのつちがさらに不思議そうな顔をしている。

くのつちの説教が終わったところで、私たちは帰ることになった。琴ちゃん是用事ということでもう帰ってしまったている。

生徒用玄関前を通ろうとしたら、なにやら人が集まっていた。見知った顔がいる。生徒会長に、風紀委員、それににつき副会長も。どうやら生徒会治安部のようだ。何やってんだろう？

「巡回ですよ。最近この辺でおやじ狩りが発生しているらしいです。しかもこの学校の生徒らしく事態の真相を究明するために二、三日前からあやっているんです」

くのつちに尋ねると、答えが返ってきた。そんなことが起こっていたなんて、初耳だ。ひどいことをするやつもいるのね。それがわが校の生徒とは。

よし、こうなったら……………

「私たちもやるわよ！」

「冗談は他愛もなく、おかしさをともなうものがいいですよ、先輩」

くのつちの冷やかな声が横から口を出してきた。人がせつかく思い立っていることを冗談と受け取るとは失礼だ。

「やつぱりやるんですか？……………やるんですね……………」

私の真剣な態度を感じ取ったらしい。

彼らの前を過ぎる際、私は生徒会治安部の人たちにむかって諸注意をしている副会長、木の実と目があつた。相手は話すことをやめた。こつちをきつい目つきで見てくる。私もそこで立ち止まって視線は外さない。外したら負けだと思った。

「行きますよ、先輩」

どちらかが目をそらすまでその場を動かなかったつもりなのに、くのつちが私を引っ張っていく。振りほどこうとしたが、やめた。それより、おやじ狩りの連中のほうを探さないと。その代わり、木の実の姿が見えなくなるまで私は彼女を見ていた。あいつだけには負けたくない。

日が暮れ、闇闇が覆う街中を私たちは歩く。事が起こりそうな人気のあまりないところを選んで。

おやじ狩りを探すといっても、闇雲に探すわけじゃない。こつちには頭脳明晰で情報通なくのつちがいる！くのつちはどうやって知ったのかわからないけど、事前にどこでおやじ狩りが起こったのか調べている。学校から東に位置しているこのあたりは、まだ事件が発生していなくて、他の方角より起きる確率が高いのではないでしようか、というのがくのつちの推理。それに私は従っている。

「けど、遭遇する可能性はかなり低いでしょうね。おやじ狩りが発生している時間帯は、深夜から早朝にかけて頻繁に起こっていますから、日が暮れて間もない今の時間じゃまず難しいです」

だったらその頻繁に起こっている時間帯も見回りをやったほうがいいのかしら？

「先輩、今よからぬことを考えたでしょう？だったらその頻繁に起こっている時間帯も見回りをやったほうがいいのかしら、とか」
鋭い。というかどんぴしゃ。

「先輩は単純ですから何考えているのかすぐにわかります。実践しないでくださいよ、それ？そろそろ期末テストに向けて、勉強しくちやいけないんですから」

「わかったわよ」

くのつちがそういうなら諦めるか。しょうがない。

それから私はやや言いにくいことだったけど、こらえておくの性に合わないから思い切って言ってみた。

「そつえば、くのつち、フーアー部の部長に何をいわれていたの？……………手なんか握られて」

最後のほうがあんまり元気がなかった。私らしくない。

「朝練を頼まれたんですよ。個人的に。真剣そうでしたので引き受けました。それとそのあだ名はやめてください」

私の思いなんかちつとも気がつかないで、くのっちはそういった。

「明日から、それ？」

「はい、明日の七時からです」

じゃあ、明日の七時から学校に来て見張らないといけないのかな。二人つきりだなんて、単なる指導者と選手だった関係が、やがて恋人同士になるかもしれない。鼻で笑いたいほどの妄想なのに、できない…………

やっぱり明日、見張ろうっと。

おまけ

理音、さっさとよろず委員会なんてどうでもいい委員会解体したらどうなの？目ざわりなのよ。

目ざわりって。ちょっと木の实、あんた！言っていることと悪いことがあるわよ！

言っていないことじゃないの？これ？

この

ガミガミ

うちの副会長が迷惑かけて悪いね、駆乃君。

いえいえ、こちらこそ。会長には申し訳ないと思っています。

あちらさんとはもかく、これから俺達は友好的に行きたいね……

……

そうですね……………

案件その11 委員長の心配（後書き）

やっぱりこの作品、感想が送られるまで続けたいな、と思います。今はまだ駄目かもしれないませんが、この小説をみて何かを感じたり、想ったりするものにしたいです。

最後に、読んでくださって本当にありがとうございます！

案件その12 やはりかの少女の祖父である

「先輩……………もうやめませんか？」

「あと、ちよっと。もうちよっとだけ」

「そう言っただけこれ三十分もたってますよ。帰って早く飯にありつきたいんですけど」

駆乃は腹を押さえて、空腹の合図をした。しかしその行為に理音は心を動かした様子はない。

調査を開始してから、だいぶ時間が経っていた。夜はますますその暗さが濃くなる。一般家庭なら夕食を食べ終わり、子どもがのんびり風呂の湯にでも浸かっているのではないのだろうか。自分もそうしたい。

駆乃がそんなことを思っていると、理音は横手にある公園に入ろうとしている。

ここで何の収穫がなかったら、再度帰宅の提案をしよう、駆乃はそう誓って理音に続いた。

人気のない静かな公園。こういう場所なら、デートでもおやし狩りでもぴったり合う。

「何もなさそうですね……………」

駆乃は簡単に公園内を見まわす。やる気がない。

「さて、そろそろ帰りましょう」

踵を返して、さっさと出て行こうとする。

「待って」

理音の手が伸びて、駆乃の肩を掴む。

「何か音がする」

言われて仕方なく、駆乃は耳をすます。

確かに何か聞こえる。それは、うめき声だった。

「あっちから聞こえますね」

指さす方向には公衆用トイレがあった。中からではない。どうや

らその裏側からのようだ。

「行きましよう」

理音はすぐに確かめようと向かっていった。

「もしかして、なんてことは起こらないでくれよ」

つぶやき、駆乃は後を追った。

視界が公衆用トイレの裏側を映した。

駆乃の想像したくもないけどしてしまった光景は、おやじ、若者の狩られているだった。うめき声は地面に倒れているおやじから。

しかし現実とは相当違った。まず、地面に倒れているのは若者。いかにもおやじ狩り趣味でやってます、と主張してそうな服装、容姿だった。彼の口から吐息まじりの呻きが漏れている。彼の仲間とされる四人の若者たちが、剣呑な雰囲気をもっているが、緊張で顔がこわばっており、余裕がないようだ。彼らは皆、視線を同じ方向に向けている。その先にいるのは、

「おじいちゃん？」

「琴？」

駆乃と理音は同時に言った。二人は驚いている。

険しい顔をして、琴とおじいちゃんこと理事長が若者たちを見ている。これはもしかしておやじ狩りを狩っているのだろうか。

二人は、駆乃達の存在に気がつくと、

「なんじゃ、お前たち。どうしてここに？」

琴も多少驚いている。

「孫娘よ。奇遇だな」

理音の顔を見た途端、理事長は相好を崩した。能天気にも手を振っている。

「なんで、おじいちゃん達がここにいるのよ？」

「なんでって、それは最近ここらで多発しているおやじ狩りを逆に狩ってやろうとな」

まるで子どものように悪戯っぽく笑う。渋みが似合う年頃の男が普通そんなことをされると不似合いなことこの上ないが、なぜか理

事長の場合それが様になっていた。

「そしてあいつらが例のおやじ狩りをしている連中だ。それ以上の話は後でな」

目線で若者らをさし、うってかわって再び真剣な表情を浮かばせる。

「さて、観念してもらおう」

返答を期待せず、一気に理事長は若者たちに詰め寄った。とりあえず、齢七十の動きではない。全身を帯電させ、青白い光を放ちながら理事長は、若者たちもをちぎっては投げ、ちぎっては投げている。接触したとたんに高電圧の電撃が流れ身体が麻痺するために別に投げる必要はないのだが、孫娘が見ている手前気合が入っているようだ。最後の一人を倒すと、威風堂々と理音のもとに戻った。

「おじいちゃん、すごい！」

予想通りの反応。口もとがにやけてしょうがないのだが、かつこよさを保つために我慢する。

「まあな」

代わりにハードボイルド風の笑みを理事長は浮かべる。それを見て、琴は気持ち悪そうな顔をしている。

「理事長先生は携帯電話をお持ちですか？」

突然の駆乃の質問に、奇妙に思いつつも頷く。

「ああ、それが？」

「大丈夫ですか？部分的ならまだしも、全身に帯電するなんて行為は、よほどきちんと条件づけされていないと、携帯電話のような精密な機械は壊れてしまいますよ」

「あ……………」

忘れていたというとぼけた顔をしてから、慌ててポケットから携帯電話を取り出す。それを開けて、

「ああ！壊れてる！」

素っ頓狂な声を上げた。

これには全員、理音までも思わずあきれ顔をしてしまった。

おまけ

孫という存在は、祖父母らにとって目に入れても痛くないくらい愛らしいそうです。かく言う自分も実家の祖父に会いに行くと、必ずといっていいほどお小遣いをもらいます。親なら渋るところを、彼らは喜んでその行為に及びます。

突然何言ってるの？くのっち。

だからそのあだ名をやめてくださいって。

つまり、孫であるものはそのことをよく理解しなければいけないということです。そうしないと彼らは孫からの頼まれごとにどんどんかなえようとしてしまうのですから。大変なことになってしまします。

ついつい孫娘の頼みでこのよろず委員会を作ってしまった俺みたいにか？

おじいちゃん。来てくれたの！？

ああ、かわいい孫娘のためにな。待ってるよ、今はまだ生徒会の傘下になってしまっているが、そのうち生徒会を超える存在までよろ

ず委員会をしてやるから。

嬉しい！

..... 自肅してください、二人とも。

案件その12 やはりかの少女の祖父である（後書き）

今日で、九月も終わりです。自分は大学生なので明日から忙しくなり、小説が書ける時間が少なくなってしまうのが悲しいです。最後に、読んでくださって本当にありがとうございます！

案件その13 やはりかの男の孫である

理事長もかねてから近辺で発生しているおやじ狩りのことを気にしていたようだった。それも自分の学校の生徒が関係しているようならなおさらだ。そのため最近は夜な夜なこうやって歩きまわって、理由もなく中年男性に不当を働く者たちをつぶしている。今回もそういうわけだと、理事長自身が説明した。

理音はそれで納得し、さらに感心しているが、駆乃はあやしそうに眉根を寄せている。

「だったら理事長、あなたはなんで琴と一緒にいるんですか？どういう関係なんですか？」

「ああ、それはな、こいつは親友とかいてマブダチだよ」

そこまで言いかけて、言葉が止まった。口を開けたまま、目を泳がす。

「な、仲の良い友の子でな。魔法も優れているし、協力してもらったんだ」

あまり流暢とはいえない口調で言い終わり、琴の頭をなでる。うつとうしいらしく琴はその手をどけた。

「まあ、一応そういうわけじゃ」

渋々といった感じに琴が言った。

理事長の様子といい、琴のその態度といい、真実であるという気が全くとっていいほしくない。

さらに駆乃は言及しようと思ったが、視界の隅で何かがちらついた。一番最初にあおむけで倒れていた若者が、のばしていた腕もゆっくりと自らの懷に忍ばせている。

理事長を若者たちに背を向けている。琴は理事長が邪魔で見えない。理音にいたっては気づいてない。

隠れていた腕が再びあらわになったとき、その手には、アーミーナイフがあった。若者の瞳は怒気で曇っている。逆上しているため

に、何をしでかしてもおかしくはなかった。

理事長と琴が駆乃の目が別の方向にとどまっていることに不思議に思う。何かがあるのか、二人がたどろうとするのと同時に、駆乃は動いた。

即座に若者も立ち上がる。痛みが徐々に引いたので期を見て奇襲をかけようとしたのだが、駆乃に察知されたことで失敗し、こそこそする必要がなくなった。ナイフを向かってくる駆乃に向けない。

いつのまにかもっていたはずの得物が手から消えてしまった。本当は消えたのではなくて、下着泥棒の件の時でも不良達におみまいした飛ぶ拳、それを駆乃が若者の得物に的中させ弾け飛ばしたただけなのだが、若者はわかっていない。ついでに手から離れたアーミーナイフの行方は、若者の顔の横を通過し、遠くの地面に落ちた。その際切っ先が頬をかすり、血がにじんできているのだが、それについて反応も示していない。示す暇を駆乃は与えない。素早く詰め寄った駆乃が若者の首を掴んだ。今度こそしっかり眠ってもらうために少しきつめに電撃を設定し、放電。

あっけなく気を失った若者を地面にゆっくり横にさせ、駆乃は三人の元に戻った。

出迎える顔は三者三様。理音はさすがはくのつち、と目でウィンクしている。琴は駆乃の能力の高さを見るたびに舌を巻いているが、今回の視線はそれに加え、さらにやや熱を帯びていた。ただ一人理事長だけは、してやられたという顔を見せた。孫の前でいい恰好を見せられなかったせいなのだろうか。

そんなことはお構いなしに、駆乃は先ほど中断した事再度上げようとした。

「それで、さっきの話の続きですが」

「あんた達、なんでここに!？」

話ができない。させてほしい。

後ろから声だけが消えるが、振り向かなくても、誰だか駆乃はわ

かる。話はどうかやらの次の機会になりそうだと。

「木の実!？」

確かめる前に、わざわざ理音が言ってくれた。

見ると、副会長を筆頭に生徒会治安部が数人いた。巡回をしているためにここによつたのだらうか。会長や書記はいない。どうかやら彼らとは別行動のようだ。

木の実、ガラの悪そうな連中が倒れていて、理音達がここにいるという状況に目を見開いている。特に、理事長の姿があるのには、驚いていた。

「理事長も!？どうしてここにいらつしやるんですか？」

「いや、なに。そいつらに襲わそうとなっていた私をこのよろず委員会の面々が助けてくれたのだ」

いかにも理事長ですというえらぶつた態度で、理事長は平然と虚言をついていた。

木の実が確かめるように理音を見るが、視線は合わない。理音は、祖父のほうをみているからだ。それも納得のいかなそうな怒った顔で。

ひよつとして理事長はおやじ狩りを成敗した手柄を、よろず委員会のおかげにしてその株を上げようとしているのだらうか。しかし、それは正直者の理音にとって当てつけにすぎない。駆乃はそう思った。

「では、後は頼む。私は少し孫娘と話が合つてな」

孫娘の不穏を感じ取つた理事長も、足早に話を切り上げ、さつさと理音を連れ去つていった。

副会長は、後始末、それもよろず委員会のでかしたことになるのに、と浮かない顔をしながらも、理事長の命に従つて部下たちを動かしていく。理音の態度は不審には思わなかったようで、むしろあれは自分のことは歯牙にもかけていないという無視と受け取っている。彼女の指示は不機嫌さが混じり、そのことが部下たちをびくびくさせた。

「帰るか」

「ふむ、そうじゃな」

ここにも特にも特にすることもないので、馮乃はそのいつて、琴は嬉しそうに同意した。

「何でそんなに喜んでるんだ？」

「お主と二人っきりで帰れるからじゃ」

「そうか」

馮乃は冗談と受け取った。

誰も聞こえないところまで、離れてからようやく二人の会話は始まった。

「おじいちゃん、もしかして私のためにやってくれたの？だったらただの恩着せよ、それ」

「そんなに怒るな。確かにそういう気持ちもあったが、それだけじゃない」

「だったらどうして？」

「俺の行動にあんまりいいと思わない連中もいてな、目立ちたくはないんだ。だからよろず委員会を隠れ蓑にしまった。すまない」

「そうだったの……………誤解してごめんね。おじいちゃん」

「いや、たとえ自分に利益になることでも不正ならばそれを良しとしないその態度。逆にオレはうれしいぞ」

「当然よ。私はおじちゃんの孫だから！」

おまけ

僕は、生徒会書記古島修っています。だらしない会長をしりぬぐいをして、きつい副会長のなだめ役でもあつて、重要で大変な役割を担っているんですよ？誰も気づいてはくれないうすけど。

その割には結構面白がっていませんか？よくからかっているのを見かけますよ。

だって面白いじゃない。今度、駆乃君も理音ちゃんにやるといいよ。副会長と似たような人種だから、きつといい反応してくれると思うよ。

オレ、そんな趣味はないんで遠慮しておきます。

そう？僕も当てはまらないけど、駆乃君も好きな子はいじめないタイプなんだ。

……………古島先輩、少しあちらで話、しましょうか。

案件その13 やはりかの男の孫である（後書き）

魔法を使ったバトルを今書きたいなと思っています。 駆乃の場合、強すぎて普通の相手だとあっという間に倒してしまいますから、相手は相当強くしなければいけませんけど。
最後に、読んでくださって本当にありがとうございます！

案件その14 彼の強さの秘密

その建物は道場というだけの年を積み重ねていた。古さや汚らしさとは違う。志しある者がここで自分の力量を上げるために切磋琢磨し、その真摯な思いがこの道場に染み付いているような荘厳さがあつた。立っているだけでも、身が引き締まってくる。

道場に掲げられた看板には、風心道場、と達筆で書かれている。普段この風心道場は子どもたちのために開き、護身術等を教えている。道場自体あまり大きくはない上に、師範一人できりもりしているのも、教わっている子どもたちは十五人ほど。なかなか盛況らしく是非子に習わせたいといってくる親が多いが、満員ですと、師範は申し訳なく断っている。

しかし、あくまで子ども教室は副業的な扱いとなっている。力を入れてないというわけでないが、この道場が建った本来の目的とは違う。本来の目的、それは発気術^{ほっけじゅつ}、というのを教えることだ。武術が魔法を一切交えない闘い方とするなら、発気術は武術に魔法をねりあわせた複合的な闘い方。風心道場では名の通り、風を主体とする発気術を教えているが、こちらには門下生は一人しかない。

今日はその唯一の門下生が来ている。

窓や戸を全開まで解放し、朝の陽光で床に敷き詰められた木の板が反射し、内部を明るく照らす。場内に入り込んでくる澄み切った朝の空気は、実に清々しい。息を吸い、肺に取り込んでいく度に、活力が全身に行き渡る。

道場という場に相応しい服装、道着を身にまとい、門下生は何度か深呼吸して心に体に力を抜かせた。それから待っていた師範に向かって対峙する。

「準備はできましたか？」

心地のいい声が、門下生にかけられる。

師範は女性だった。しかもファッション雑誌のモデルをやっ

てもおかしくはなさそうな美貌と容姿。師範をしているといつても、冗談と受けとつてしまうほうが多そうだ。しかし、門下生同様彼女も道着を身につけている。彼女も門下生のほうを向いているが、その瞳には輝きがない。幼少のころ、病気で視覚を失ってしまった。

彼女のつややかな髪は常に揺れている。外から侵入してくる微風ではありえず、これは彼女自身から発している風からもたらしたものだ。

「はい」

門下生は緊張で顔を引き締めて頷く。

「今日こそあなたに一撃当てるつもりです」

「駆乃、私はそういうあなたの冷めているようで意外に熱いところが好きですよ」

師範は微笑ともに送る。

「……………始めましょう」

聞き流し、唯一の門下生、駆乃は足を開き、腰を落とした。眼鏡は安全のためはずしている。裸眼の双眸はやや細く鋭い。駆乃も風を体から垂れ流した。

対する師範は構えず自然体のまま立っている。その代わりに、ひとときわ師範から吹いてくる風が強くなった。彼女と距離をとった位置にいる駆乃にも感じるほどに。

「来なさい」

師範に促され、駆乃は即座にバネのようにはじけた。自身の風に背を押され、疾走する。互いの拳が交わる前に、さきに二人の風が激突した。が、あっけなく均衡は崩れ、駆乃の風が力負けする。師範の大きな風の抱擁中で、駆乃は消えないまでも衣のように体の表面の覆う程度しか風を身に巻けなかった。

それを気にすることなく肉薄し、ためらいもなく駆乃は全力で拳を突き出した。目の見えない師範は、しかしまるで目に見えているようは反応をし、軽く受け流す。そのまま流麗な動きで一歩踏み込

み、手の平を駆乃の胸に当てるのではなく、置いた。

咄嗟に駆乃は一步後退しつつ体をひねった。わずかに手の平の延長線上に残った道着のはしからちっという擦過音が走る。圧縮された空気が衣服をかすり、空間を一閃した。

駆乃が時々繰り出す風の拳に似ているが、少し違う。難易度的はだいぶ違う。駆乃のは拳圧とともに放つので、風心流発気術基本中の技、飛拳ひげんという技なのだが、師範はわざわざパンチとともに出さなくても放てる。そのくせその威力は駆乃の倍以上。今だって本気を出すと道場があなだらけになってしまうということで加減しているほどだ。駆乃が未だに達していない境地だった。

その境地の名は、空風くふうという。

体勢が崩れているが、距離を取って整えようとはしない。そんなことをするなら、師範の空風が雨あられの如くお見舞いされる。駆乃は強引に師範の側面に回り込んで、打ち込む。仮に視覚があつても視界外からである攻撃を、しかし師範は危なげもなく紙一重でかわす。動きは風の助力を得た駆乃の鋭さとは相対してしなやかでゆつくりのはずなのに、その後繰り出す駆乃の次々の猛攻を避けきり、捌き切る。相変わらずどれだけ当てにいつても、先読みしているかのようになんか攻撃もまともに当てられない。

わかつているとはいえ、自分のしていることが無駄となると少々悔しい。

「くっ」

渾身を込めた拳は、やはり防がれた。止められたといったほうが正しい。師範は風の壁を展開し、阻み、駆乃の動きを止まらせた。

その間を見逃さない。華奢な脚の割に、暴風でコーティングされているため豪快な足蹴りが駆乃のこめかみを襲った。間一髪師範の一蹴は避けれたが、それがもたらす攻撃を完全に避けきることはできなかった。足が纏っている痛烈な風の一撃を受けて、ふらつく。よろける駆乃に、師範の追撃は空風。

師範の髪がさらに激しくなびいた。駆乃が持てる風力を全開に放

出したからだ。一時的、師範の風を押し出す。荒々しい向かい風を受けて空風は急速に失速し、それでも突き進む残り風を駆乃は手の甲ではじいた。そのまま攻撃の手を打とうとしたが、何かを察知し素早く身をよじろうとする。だが結局自分が意図しない手段で師範から離れた。

空風は一つだけではなかった。駆乃に伸ばした右手の平以外にも、だらりと下げている左手も手の平を駆乃に向けていた。ボクサーのアップパーよろしく顎に打つ抜けるような衝撃を食らう。

「はっ！」

裂帛の気合いをこめ、間髪入れずに師範は飛拳を放った。宙を滑空し、駆乃は吹き飛ぶ。かろうじて体を回転して、足から着地。だが立ち上ろうと思っても、頭がくらくらしてその場でころんと倒れてしまった。先ほどの、顎への一撃が効いたのだろう。起き上がれない。

「負けた……………」

大の字に寝っ転がって、駆乃は大きく息を吐いた。潔く負けを認めたのはいいが、それでも心中は悔しさがわだかまっている。

「でもいいほうだったですよ？ 駆乃」

駆乃の心を読んだような励ましの声をかけ、師範は近くに寄ってきた。既に発する風は微風。

「風にはだいぶ乗れています。けど、風に『乗せる』のはもう少し、ですね」

「それでも師匠には、未だに一撃も当てられません」

拗ねたように駆乃は言う。幼いころからこの道場に通い、師範とは気心知れた仲なため、幾分表情が豊かだ。目に見えなくても、駆乃の様子が手に取るようにわかる。くすくすと師範は失笑を漏らしてしまう。

「成長しているけど、まだまだということですよ」

「次こそは……………」

ほそを噛み、力いっぱい駆乃は拳を握りしめた。

それを実に楽しそうな顔をして師範は見下ろす。才気ある若者が努力し、どこまで登って来られるのか。いつか自分を超える日は来るのだろうか。心配もあるが、それ以上に楽しみで楽しみでしかなかった。

その日を彼女は期待して待っている。

おまけ

駟乃、理音から聞いたぞ。お主、発気術を習っておるらしいのう。道理であんなにも強いはずじゃ。今度、手合わせ願いたいものじゃな。

お前も何かやっているのか？

まあなの。で、どうじゃ？手合わせ。

断る。

つまらんのう。女と戦うのはそんなに苦手なのか？

ああ、苦手だな。……………いつも負けっぱなしだしな……………

？ 最後に何と言ったのじゃ？よく聞こえなかったのじゃが……………

気にしないでくれ……………

案件その14 彼の強さの秘密（後書き）

前回に言ったとおり、今回は少しバトルものになっています。やや学園ものから逸脱して言う気がします

……

最後に、読んでくださって本当にありがとうございました！

案件その15 副生徒会長の思惑

駆乃はこつてり師範に絞られたあと、今度はフーアー部の部長、遠野伊沙子との朝練習が待っていた。ハードなスケジュールであったが、それをおくびにも出さないで部長に付き合っている。

二人は今スタートラインに立っている。一回本気で勝負してほしいと、伊沙子に言われそれに駆乃は応じた。

二人は一番代表的なスタート方法、クラウチングスタートで構え、その時を今や今やと待ち受けている。

「それじゃ、行くよ」

「はい」

駆乃の確認を取ってから、伊沙子は前を見据える。その面持ちは強者と競え合えるという喜びと緊張が半々で占めていた。

距離はグランドの端から端までのおよそ二百メートル。フーアーの競技では一番短い距離だ。

スタートの合図は伊沙子に取ってもらったことにした。若干平等さに欠けていることに部長は不満の様子だったが、審判役を買ってくれる人は他に誰もいないので渋々頷いた。

「よいい」

風を纏う。

「どんっ！」

合図とともに飛び出す伊沙子。しかしそれでも駆乃と同時。

最初の二、三步は助走のために地面を駆ける。それから両手の平を後方に向けて、飛ぶ。それが基本だ。伊沙子はそれに従ったが、駆乃は一步で宙に浮いた。伊沙子の足が地面から離れる頃には、引き離された駆乃の背中がどんどん小さくなった。

予想通り、いや予想以上だった。速い。

差が縮まるどころかさらに広まって駆乃はゴール。遅れて伊沙子もそれに続いた。

「す、すごいね。駆乃君は」

荒い息をつきながら、とづくに着いていた駆乃に尊敬の眼差しを送った。

「いえ、部長もなかなかだと思いますよ。」

息を小さく乱しながら駆乃は言う。言葉よりも、その息を整える態度に伊沙子は嬉しく感じた。我が部の弱小ぶりは世に知れ渡っているために、他校との練習試合の時には格下と見下して手加減してくる輩がいたりするが、彼は違い本気で勝負をしてくれた。負けはしたものの、悔しさよりも満足感のほうを胸を占めた。

「飛んでいるときの安定感があります。ただ、飛ぶ前の風を纏う際に、若干頭の部分の風の層が足元よりも薄いですね。そのために初速がうまく加速しないんです」

きっちり伊沙子のフォームの分析をしていたらしい。その指摘を受け、伊沙子は風を展開させる。

「こう、かな？ 駆乃君？」

意識をやや頭部に集中させ伊沙子は、こちらを見ている駆乃に尋ねる。

「まだ、バランスが良くないですね」

そう言われたので、伊沙子はかすかにうなりながら自分を取り巻く風を調整することに気をつけていく。

すると、

「失礼します」

後ろから駆乃が両肩に手を置いてきた。思わずびくつと肩が上がりますが、言葉は出なかった。

黙っていると、自分の風に違和感が入り混じる。習字の際に、先生が生徒の筆を持つ手に自分の手を添えてきれいな字を書かせるのと同じような自分の風に修正が施される。駆乃が伊沙子を通じて伊沙子の風の層の不安定を取り除いたのだった。

「この感じを覚えてください」

そのために、抵抗はあったが伊沙子の肩を触わることになってし

まった。だが、

「……………」

「？ 遠野先輩？」

「へ？あ、そう、うん」

反応がかえってこなかったので、名前を呼ぶと返ってきたのはいが返事がぎこちなかった。本当にわかったのかと駆乃は疑問に思ったが、自分が手入れを加えた風の層を維持している。どうやらきちんとしてくれているらしい。

安心して、その肩から手を離すと、それをはかったように安定していた伊沙子の待っている風が均衡を崩した。

「あはは、ごめん。難しいね、これって」

苦笑して、伊沙子は言う。どうしてだろうか、駆乃にとってそれはひどく不自然に見えた。

しかしなぜそんなことをするのかわからない。気のせいだろうと考え、再度伊沙子の肩に手を置く羽目になった。それを目を閉じて伊沙子は受け入れる。その口には小さな笑みが浮かんでいた。

「悔しい！」

バンつと長机が壊れるんじゃないかと思われるぐらい力いっぱい木の実を叩いた。木の実の力ならあと四回ほどで、あの長机の寿命が尽きてしまいそうだ。生徒会長、芹沢泰文はそんな能天気なことを考えていた。

朝っぱらから自分たち二人を生徒会室に呼んでおいて、いきなり大声で怒鳴る木の実を泰史はそんな態度で向かえ、隣のいた書記の古島修は大げさにため息なんかをしている。

「壊さないで下さいよ。備品は安くないですから」

古島のぼやきに木の実は、きつい視線を送った。

「そんな揺るい態度だから、よろず委員会にいいところを持つてかれるのよ。私達がおやじ狩りの連中をみつけるはずだったのに！」

「そんなこといつてもな？」

泰史は古島を見る。

「そうですよね、生徒会長」

泰史の胸の内を読みとり、修は同意を示す。

「それにまだ、本命のこの学校の生徒が関与しているおやじ狩り集団はみつかっていないんでしょう？ まだまだ挽回はできますよ」

「そうだぞ、木の実。だからそんな悔しくなる必要はないぞ。というわけで俺は教室に帰ってひと眠りでも」

「ふんっ！」

ゴンっと、嫌な音がした。

この人はいつも一言余計な事を口走るのだろうか、古島はすでに隣にいず、ぶん殴られて後方の生徒会室のはじっこにて沈んでいる泰史に疑問を抱いた。

「ともかく！」

一人欠け、もはや修しかいないのだが、木の実は満員の観衆にむかっていうような大きな声を張り上げる。

「これ以上よろず委員会にでかい態度をさせないためにも、予定を繰り越して今日から治安係に例の一年生を加えることにします。異論は認めません！」

静杏学校の生徒会。実質この生徒会の運営をしているのは生徒会長ではなく、副生徒会長であることが雄弁に物語っている光景だった。

おまけ

あ、あの部長。 肩にくのつちの手が置かれている！

いやだったら、止めにいけばよいじゃろ？なぜこんなところでこそ隠れているのじゃ？

そんなこと、嫉妬深いって思われるじゃない。

既にお主は十分、嫉妬深いと思うぞ。

確かに……………そうね。……………そういえば何で琴ちゃんはここにいるの？

案件その15 副生徒会長の思惑（後書き）

また新キャラが出そうな感じです。結構重要なキャラなんですけど、まだ今あるキャラについてあまり深く掘り下げていないのに出しているのか、ということに迷っていますけどどっちがいいんでしょうか？最後に、読んでくださって本当にありがとうございました！

案件その16 一年生で一番の逸材

「うーん」

会室の椅子に腰掛けて、理音は悩みこんでいた。雑誌を手を持ち、その内容を目を這わせている駆乃に凝視したまま。

「うーん」

雑誌の題名は、風々。フーアーについての内容が盛り込んでいるフーアーの専門雑誌だ。今までそんな雑誌を読んでいたことがなかったのに、なぜ今日は見ているのだろうか？

という疑問に対して、すでに頭の中にはある解答が浮かんでいた。それは例のフーアー部の部活救済のためという答えだ。この依頼に駆乃は特にやる気を見せていた様子はなかったが、だからといって怠けることもないのが駆乃だ。大方きちんと依頼をこなしたいためにそういった情報誌をみているのだろう。

しかし今朝のフーアー部の部長、伊沙子の朝練習を付き合っている駆乃を見てから、心の中で何かがざわついていた。そのせいで、もしかして駆乃は依頼だからという理由だからではなくて、あの部長個人のためにやっているのではないのだろうかという疑念に駆られている。さらにその思考は妄想に変化して、理性というつつこみなしに進む。やがて二人は朝の練習を通して、心まで通い合ってしまうのでないのだろうか。今朝の体が触れ合うほどずいぶんいちやいちや（理音から見て）していようだし、ありがたい話ではない、というかありえる。

「うーん」

そうなると今の自分は非常にまずいのではないだろうか。確かに委員会が一緒に、またこの委員会は暇あれば毎日この会室にいないてはならない。依頼をこなさなくてはならないし、なくても今みために依頼に訪れる人のために待機しなくてはならないからだ。そのため毎日のように駆乃とは顔を合わせている。しかし会っている回

数は多くても、それだけで仲が進展すればクラスメイト同士は皆恋仲になってしまう。そしてそんなことはもちろんない。

それはあくまで機会が多くなったただけだ。しかしその機会を自分は全く生かしていないような気がする。

「うーん」

だからといって何をすればいいのやら。今度、琴あたりにでも聞こう。ところで、なんであの場に琴がいたのだろう？偶然？

「うーん」

「先輩、考えているなら黙って考えてください。本に集中できません」

理音の呻きに、ついに我慢できなくなった駆乃が顔を上げた。

「それは集中力がない証拠なのよ。ほら、琴ちゃんを見なさい」

琴は左に詰碁の書籍、右手は囲碁盤に碁石を置いている。□元からはぼそぼそ思考から漏れ出しているが、他人には聞こえないぐらいのつぶやきだった。理音達の会話は耳に入っていないようだ。

「琴ちゃんはきちんと集中しているわよ」

「人によって集中の度合いは違うんですよ。先輩だって読書中、隣で人がいびきしていたら読書に集中できないでしょ？」

「全然」

理音はきつぱり首を振った。隣で工事の騒音があっても、面白ければ簡単に本の世界に入っていける。

駆乃はため息をひとつ、それ以上言うのをやめてしまった。

会室のドアが、勢いよく開かれる。

「失礼するわ」

そう言っている割には戸を叩くこともせず、ずいぶん粗暴な態度で木の実が現れた。見知らぬ男子生徒を引っ張ってきて。

「何の用？」

木の実の前に立って腕を組んだ理音は、声音を低くして言う。対して、男子生徒の服の裾を掴んでいた手を放ち、木の実は腰に手を当て威嚇する。

解放された男子生徒は体格は中背中肉と一般的。美少年という言葉に手が届きそうな顔立ちだが、あまり身なりを気にしないのか、髪が寝ぐせのまま放置している。自分がどこにいるのかわかっていないようで不思議顔で室内を見回した。そして、視線が駆乃と合った。

「あ、駆乃」

「蓮、どうしてここに？」

駆乃も不思議そうな表情をしている。男子生徒が誰だか駆乃は知っていた。しかも友達という親しい部類に入っている人物だった。

「どうしてって言われてもな、俺もなにがなんだか………」
頭を軽く掻きながら困惑を示す。

まるで武士が互いに真剣を持って今にも激突しそうな対峙が、木の実が浮かべた勝ち誇った笑みで状況が変わった。

「何よ、その笑み」

不審そうに眉根を寄せ、なぜか優越感を含んだそれを問う。

「ちよつと、一年生で一番の逸材を紹介しようと思って来たのよ」

駆乃と話していた男子生徒を強引に引っ張って誇らしげに胸を張る。

「この子は一年五組、天道蓮^{てんとうれん}よ。今日から治安係の一員として我が生徒会に多大なる貢献をしてくれるわ」

駆乃はそういったことにあまり興味がなさそうだった蓮がなぜと驚いたが、自分以上に驚いている蓮の表情を見て悟った。

ああ、こいつ説明なしに無理やり連れてこられたんだ、と。

同じクラスの友人として、今の彼の状況に憐れんだ視線を送る。

理音はふんと鼻を鳴らした。これが木の実の言う一年生で一番の逸材？だが、しかし、

「そいつがどんな魔法を持っていたって、一年生で一番なのはこのくのつちよ！」

「オレに振らないでください。それとそのあだ名、やめてください」
理音に期待とともに指さされた駆乃は、その思いを阻むように手

を壁代わりに前に出す。とぼつちりは受けたくない。

「いいえ、この蓮のほうよ!」

頑として木の実はそう言い張った。

「違う。くのつちのほうよ!」

理音も譲る気はない。

「蓮よ!」

「くのつちよ!」

「蓮!」

「駆乃!」

「わかった。こうしましょう」

このまま言い合っても無意味と知った木の実は提案を持ちかけた。

「どっちの魔法のほうかすごいかな勝負するのよ。それで勝ったほうが一年生で一番の存在」

「乗った!」

理音も乗り気だ。

駆乃の思いとは裏腹に事態は進む。

おまけ

しかし、まあ、会長つてのは肩がこる役職だな。会長になったら、休日が増やせるぞと、とある友人から言われたから立候補したのに、なつたはいいがそんな役得もなく…………… ふむ、年甲斐もなく誰かに肩をもんでもらいたいものだ。

あんたは寝てばかりいるでしょうが！ふざけんな、泰史！

失敬な。俺だって頑張っているぞ。そうだ、木の実、お前が肩揉んでくれ。

ほう、いつもなにされているのかわかっていつてるのよね。

いつも何されているのかわかってても、だ。

何よ、その妙に真剣な顔は…………… ふう、しょうがないわね。特別にやってあげるわよ。あんたには感謝することもないでわけもないし。

そんなこともあったのか。覚えがないな。で、どんなことだ？

べ、別に、言うほどのことじゃないわよ。

案件その16 一年生で一番の逸材（後書き）

天道蓮。自分の中ではもう一人の主人公的な存在として扱う予定です。

最後に、読んでくださって本当にありがとうございます！

案件その17 実はやや天然

「なあ、駆乃。どうして俺、ここにいるんだろ？」

「それは俺のほう聞きたい」

隣にいる友人に蓮は尋ねたが、そっけない返事が返っただけだった。

自分と駆乃の二人は今、学校の正門にいた。放課後なので、生徒達が正門の下で立ち、学校に向いている駆乃達の横を奇異な尻目を含んでから通り過ぎていく。

なぜ自分達がここにいないくはならないのかという命題に対して頭を悩ませている駆乃達の後ろで、

「いいわね、理音」

「そっちこそ。負けた後にとにかく言わないでよ」

火花を散らす先輩方。野々山木の実と佐久間理音だ。学校で有名な犬猿の仲として知られているが、自分には全く関係ないところでやっていて絶対に接点はないと思っていたのに……

なんでこうなったんだろう？

現実逃避に近い回想にはいる。

それは帰りのショートホームルームが終わった直後に起こった。さて帰るかと思った矢先に、ガラッと教室の戸が開かれる。女子生徒。カチューシャで髪を抑え、スレンダーな体つきをしている。だからといって華奢というわけはなく陸上部で走ってそんな健康的な容姿をしていた。何が不満なのか、不機嫌そうな表情をしている。

入口付近のまま中に入らず屹立しており、一度手に持つ紙を見て

から、視線を室内を彷徨わせている。

何してんだという心の声が、担任も含めクラス全員から出ている。例外として、蓮の友人の駆乃はさっさと教室から出てしまっているためすでにいない。

女子生徒の目線が蓮に止まった。それから紙と蓮を交互にみている。

得心がいったのか、紙をポケットにしまい、蓮の元に近寄った。

「天道蓮ね？」

「へ？あ、まあ、そうだけど」

「あたしは生徒会治安係、一年の日羽夕実。生徒会からの要請により、あなたを連れに来たわ。ついてきて」

返答を聞かずに、夕実は踵を返し教室を出ようとする。

自分が何かをしでかしてしまったのだろうか、そう思ったが、その何かを考えようとする時間を与えずに夕実なる女生徒が去ってしまうのでまず足早に後を追った。

追いついた蓮は、夕実に質問しようとしたが、生徒会室に向かうその後姿にはなぜか話しかけがたかった。それでもと、蓮は口を開く。

「あのさ、なんで俺が生徒会に呼び出されたんだ？」

「……………」

「何かしてはいけないことをしでかしたか？俺？」

「……………」

無視された。

それ以上は無駄だと悟った蓮は口をつぐみ、黙って後をついていく。

進み、やがて生徒会室の前で止まった夕実は、蓮が自分の隣にいることを確認してから、ドアを二回ノックしてから開ける。

「失礼します」

蓮に接する態度とは真逆の丁寧な物腰で夕実は生徒会室に入った。その半分ぐらいの気持ちと挨拶で蓮も中に入る。

「言われた通り天道連を連れてきました」

言われたとおり、にやや強調が入っていた。頼まれたからやっただけで、不本意だというのが垣間見える。

「御苦労、日羽」

応えたのは、生徒会長。確か名前は芹沢泰史だったと蓮は記憶している。顎に手をあて、戸惑いを見せる蓮をお構いなしに面白そうに観察している。

「君が天道連か。ほうほう」

「もういいでしょ、泰史」

隣で座っていた副会長の野々山木の実が立ち上がった。

「私はこの一年を連れて、早く行きたい所があるんだから」

「自慢にはつかわないでくださいよ」

木の実とは反対側の隣にいた書記がそつ口を出した。蓮はこの書記の名前が思い出せない。

「自慢じゃないわ。報告よ」

木の実はそう言い放ってから、蓮の手首を掴む。

「ついてきなさい」

「ちょ、ちよつと。なんで説明はなしですか？」

慌てふためく蓮、投げ与えられた言葉は、

「面倒だから、説明なし。察して」

ぴしゃりと木の実にそう言われ、代わりに他の面々を見るがどの顔も自分もパス、という否定が表している。取りつく島がない。

そのまま引きずられるように、生徒会室から出ていくことになった。

そして、その後よろず委員会の会室に行き、なぜか自分が生徒会直属の治安係になる、というより既になっていたということを知った。

そのことに驚きはしたものの、不平不満は洩らさなかった。こういうのは普通、任意のはずだと思うのだが強制だとは蓮は知らなかった。もちろんそんなことはないのだが、蓮は誤解していた。

おまけ

綾君、やっぱり行こうよ、よろず委員会に。

嫌だ……僕は行きたくない。

怖いのはわかるけど、それでも助けてもらったんでしょ？お礼は言わなきゃ。じゃないと失礼だよ。

でも……

ね？

……うん。わかったよ、珠ちゃん。行くよ。

じゃあ、善は急げ、だよ。今は放課後だから、きっといると思うから。

うん、行こう。

案件その17 実はやや天然（後書き）

前回からずいぶん間が置いてしまいました。反省しています。最後に、読んでくださって本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0898f/>

よろず委員会！

2010年10月10日05時44分発行